

メキシコ壁画運動

——リベラ、オロスコ、シケイロス——

加藤 薫

著

現代図書

「オロスコ」——一九二七年にタタタラハラの州政府庁の天井および階段部の壁画に取りかかる。遠近法を強調した『戦うイタルゴ神父』は、渦を巻くように見る人の目を吸い込んでゆく。



「シケイロス」——一九二七年より

チャプルテペック城の（革命の間）

壁画プロジェクトを開始する。

『テアス独裁制から革命へ』と題する作品には、様々な場面が絵巻物のように連続している。

メキシコ壁面運動

——リベラ、オロスコ、シケイロス——

加藤 薫

著

現代図書

メキシコ壁面運動

目次

I 革命の芸術

メキシコ革命前後……………12

メキシコ革命……………18

革命の芸術……………22

II 壁画運動の先駆者たち

アカデミスムとアカデミアの問題……………26

ロマン主義とコステンプリスタ……………29

素朴画の系譜……………33

グラフィック・アートの貢献……………38

III モダニズムの洗礼

アカデミアの変貌……………46

美術モダニズムへの対応……………50

新しい芸術を求めて……………54

IV **なぜ、壁画だったのか**……………63

壁画運動の受け皿づくり……………64

壁画の歴史……………70

壁画の材料と技法……………80

なぜ、壁画だったのか……………86

V **壁画の三巨匠**……………93

ホセ・クレメンテ・オロスコ……………94

デイエゴ・リベラ……………131

ダビッド・アルファロ・シケイロス……………174

VI **壁画運動の展開**……………209

壁画運動を支えた美術作家たち……………210

壁画の第一世代……………212

壁画の第二世代……	219
壁画の第三世代……	226
壁画の国際派……	229
壁画運動の統計的分析……	231
一九七〇年代以降の壁画運動……	237
壁画運動と日本……	241
あとがき……	246
メキシコ壁画運動	
現代図書バージョン出版によせて	
地図(メキシコ市中心部)……	8
メキシコにおける主要な壁画年	
壁画を制作した作家たちが	
初登場する年の年次別リスト	
	255
	251
	249

索引

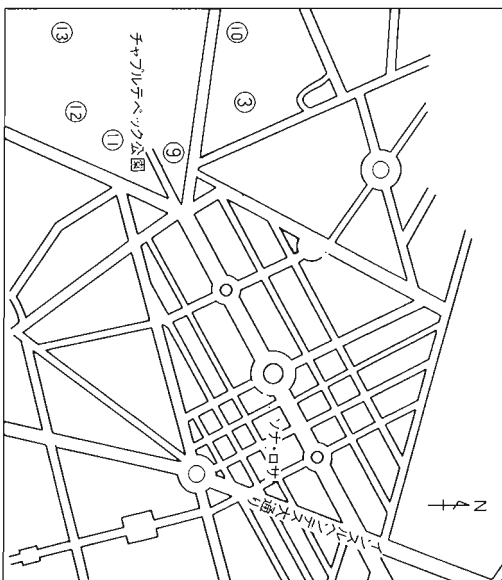
283

参考文献

259

メキシコ市中心部

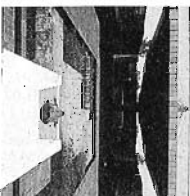
- ① 憲法広場 (ピカロ)
- ② アラメーダ公園
- ③ チャマルテペック公園
- ④ メキシコ市博物館
- ⑤ 諸文化博物館
- ⑥ 民芸工芸博物館 (展示・販売場)
- ⑦ サン・イグエコ絵画館
- ⑧ サン・カルロス美術館
- ⑨ 国立近代美術館
- ⑩ 国立人類学歴史博物館
- ⑪ 国立歴史博物館
- ⑫ 新歴史博物館
- ⑬ 国立自然史博物館
- ⑭ 国立芸術院
- ⑮ 国立宮殿
- ⑯ カネトラル
- ⑰ 最高裁判所
- ⑱ 連邦区政庁
- ⑲ 文部省
- ⑳ サン・カルロス美術学校
- ㉑ タイルの家 (サンホルンズ百貨店)
- ㉒ ノアアルコ・トラテロコ大団地群



国立近代美術館



タイルの家 (旧オリサバ侯爵邸。
現サンホルンズ百貨店)



国立人類学歴史博物館

メキシコ壁面運動

リベラ・オロスコシケイロス

I

革命の芸術

メキシコ革命前夜

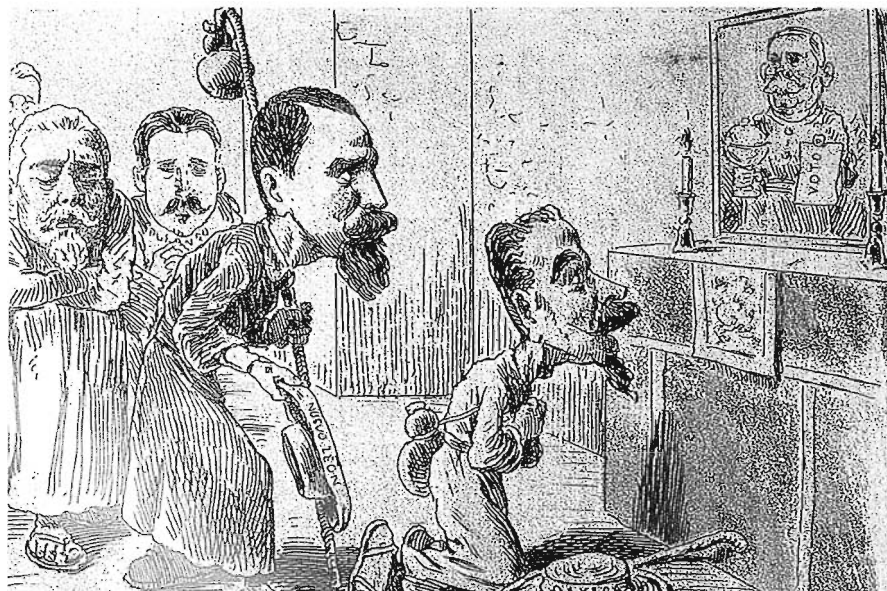
一九一〇年九月十六日のメキシコ独立記念日に、ポルフィリオ・ディアスは政権を握って三五年目の盛大な式典をあげた。この日はまた、ちょうど百年前にミゲル・イダルゴがインディオやメスティーソを集めてドロレス村で武装蜂起し、独立運動の端緒を開いた事件から切のよい、メキシコ共和国独立百年を祝う日もあった。今日見られる市街地の飾りつけや祝賀会の開催、軍隊パレード、式典の次第は、すべてこのディアス時代に慣習化したものである。

メキシコの繁栄と進歩は誰の目にも明らかかなように思えた。そしてその繁栄がディアスによってもたらされたかのようにも。事実、この独立記念日の三週間前の大統領選挙でも、ディアスは数百万票の圧倒的多数で再任されているのだった。

ディアスの世紀末

だが、メキシコの国家統一と近代化を成し遂げた独裁者ディアスの心は、とうの昔からメキシコにはなかった。ディアスおよび彼を取り巻くクリオーリョ出身の上流階級の人間たちは、ヨーロッパ、とりわけフランス文化に限りないあこがれと愛着を持っていたのだ。ディアス自身はオアハカ州の貧しい一農村のメスティーソ出身であり、長年、ゲリラ戦を戦いぬいてきた実績で最高権力者となった人である。勇者であったが、また野人でもあった。白人の世界に対する彼の好感の示しかたは、出生に対するコンプレックスの表れであると共に、一八八三年に結婚したカルメン・ルビオという、資産家のクリオーリョ家庭の出身である女性の影響が大きかったといわれる。

ディアスの取り巻きのなかで一番影響力を持っていたのは、一般にシエンティフィコとよばれる、実証主義を信奉する自由主義者たちであった。社会の進歩や経済の発展は社会科学的方法によって解明できる法則があり、この法則を合理的に分析できる知的エリー



「祭壇に神のように祭ったディアスの肖像画の前で祈る。選挙前の地方ボスたち」
雑誌「イーボ・デル・アウイソテ」収録、作者不詳、1902年、メキシコ国立新聞雑誌保存庫蔵

トが政治改革を担うべきであると考えていたシエンティフィコたちは、一方でディアスの独裁制を批判することなく徹底的に利用しながら、自由主義者を自称していたのである。

ディアスが、実証主義を理論の根拠とするシエンティフィコたちに洗脳されたのはいうまでもない。オーギュスト・コントの主張する実証主義は、ディアスの敬愛するフランス文化のなから生れたもののだから。そしてシエンティフィコたちは、メステイソやインディオの存在を社会発展の阻害要因と考えていた。ディアスが果たした大きな貢献は、独立後も内乱と外国の干渉で混乱し、荒廃してゆくメキシコ社会で、多分に武力によるものとはいえ、社会秩序と平和の回復、治安の維持に一応成功したことにある。その武力が、今度はメステイソやインディオ勢力の抑圧に向けられたが、ディアスは一方で、彼らを労働力としても徹底的に利用した。そして、優れたものとされるヨーロッパ社会に追いつくことだけを目的とした。かくしてディアスの周辺からは、かつて行動を共にした軍人やメステイソの地方ボスが遠ざけられていった。

外国資本に犯されるメキシコ

要するにディアスの目指した近代化は「西欧化」ということであり、その近代化の指標は、あくまで西欧の欲望によって正当化された幻想だったのである。ディアスはあらゆる産業部門への外資の導入、外国資本の進出と土地取得を、ほとんど無制限に許可した。そしてこれら外国資本はまさしく近代的な経営方法で産業を振興し、交通網を整備し、輸出を増加させ、国家財政を黒字にした。だがその反面、メステイソやインディオたちは土地を奪われ、独立前にもまして困窮し、飢えるようになった。しかも、外国資本の支配と、ディアスの専制のために才能を伸ばせないでいる新興の中間階級の不満は増大する一方だった。

一九一〇年の独立記念日にディアスを祝ったのは、一旦は失った勢力を回復した聖職者組織、ディアスの数回にわたる土地法改正であらたに国土の三分の一を獲得したアシエンダの領主のうちの保守層、国土の五パーセント弱を握り、鉱山や石油、流通業や水道、電気、鉄道などの公共事業を牛耳る外国資本経営者た

ち、そしてコミッションや賄賂で潤うクリオーリオのテクノクラートであった。聖職者のうち上位の席はヨーロッパ人で占められ、メキシコ出身者は下積みそのままに置かれた。多くの保守的なアシエンダ所有者は、実際の経営を支配人に任せ、本人たちはメキシコ市やパリ、マドリッドでヨーロッパ風の上流生活を享受していた。

つまりメキシコという土地を利用して利潤を挙げてはいたが、メキシコ人という意識を持たず、その母国を嫌悪さえる人々によつて、メキシコは統一国家としての体面を保っていたということである。先に述べた選挙の得票数が、賄賂と暴力に基づくものであったことはいうまでもない。

生命より外に何も持たない農民や労働者たち

では、メキシコの国民と呼べるような人たちは一体どのような状態におかれ、何を考えていたのだろうか。

まず、当時の全人口の八四パーセント以上を占めていた農業従事者は、地域差はあるにせよ、平均すると実にその九九・五パーセントが土地を持っていなかった



「アシエンダ領主の横暴」、ポリクロミア
工房レブリカより、ホセ・ガダル・ベ・ボ
サダ、1910年頃、亜鉛版にビュラン直彫り：
パベル・チーナに印刷、個人蔵

たとされている。つまり農民のほとんどすべてが、ペオンとしてアシエンダに拘束されこき使われていたということである。彼らの賃金は、独立以前の十八世紀末当時のままに置かれていたという。一方で物価は、十九世紀末までの一世紀の間に、たとえばトウモロコシは約二倍、小麦粉にいたっては約七倍に上昇していた。ペオンたちは賃金の前借りという形で、アシエンダの独占的に経営する小売店からその日生きるための食料を手にしたが、この借金は増えるばかりで、まだ生れぬ子供にまでそのつけは回された。こういった忍

耐の極限にまで追いつめられていた農民は、自由という言葉も知らずに自滅するよりも、まず戦ってから死ぬ道を選ぶようになった。局地的ゲリラの域をでなかつたとはいえ、モレロス州で次々にアシエンダを襲う貧農出身のエミリアーノ・サパタの反乱の勢いは激しく、同じ境遇で苦しむ各地の農民は、自分たちも何かできると感じはじめていた。

季節労働者が混じるため数字は確定できないが、当時肉体労働就業者の一四〇五パーセントに達していたといわれる鉱山および工場労働者は、さらに増える傾向にあった。たしかに農業ペオンより給料はよかったが、労働条件は劣悪で組合結成の動きはことごとく潰され、指導者はあつさりと殺されたし、事故に対する補償など経営者は考えもしなかった。ここではいつ反乱が起こつてもおかしくなかった。

徴兵制によって狩りだされる兵士たちの待遇もひどいものだった。人数合わせのために有無をいわさず、ヘフェ・ポリティコ（地方行政担当責任者）が若者を兵役に送り込む一方、治安維持のために犯罪者、政敵、浮浪者も徴兵され、獣のように劣等視されたインディ

オも強制的に連行された。給料はまったく名目的なもので、支給される制服も食事もひどいものであり、内部での暴行や盗みは日常茶飯事のように起こった。食料や俸給、軍需品は指揮官によってかすめとられ、徴兵逃れの代償として受けとる賄賂と共に彼らの私腹をこやすために利用された。

しかし、メキシコ国内を移動する兵士同士の間には、ある種の連帯感が育つようになっていた。それは虐げられた者同士の共感といってもよいかもしれない。それまでは狭い地域社会での生活しか知らなかった下層社会の人間が、様々な地域の出身者と出会い、異なった方言や風習に驚きながらも、「メキシコ的な」とも呼ぶべき喜びや悲しみを共有できることを認識するようになったのだ。

そしてこの連帯感は旅の先々で出会う貧しい人々や、行動を共にするソルダデラとの交流のなかからも生れてきた。兵士たちの誰もが共通の敵を認識しはじめた。それは、直接的には私腹をこやす指揮官たちであり、さらには彼らをあやつり、しかも彼らから搾取する外国資本と、ディアスその人であった。

中産階級の形成と大地主の不満

外資を巧みに利用して産業を飛躍的に発展させた結果、それまで大きな政治力を持つには至らなかった中産階級と呼べるような層が、厚みと多様性を備えてきた。その大部分はメステイソ出身者であるが、地方の小ボスやアシエンダの現地管理者、教区を担当する聖職者といったように、基本的には富裕階級についてそのおこぼれを享受していた従来のタイプの人々とは異なり、自前の工場を持ったり、知的な技能を活用して独立した事務所を構えたり、知識を利用して教育や司法分野などに従事する人々であった。事業拡大や地位向上の意欲に燃えるこの新興層は、一九一〇年頃にはメキシコ総人口の八パーセントくらいに増えていたという。だが才能に対する自信や事業欲が強いだけ、一部の上流階級があらゆる特権を握っている窮屈で旧弊の多い社会では身動きがとれず、不満は増大していった。都市を中心に、こういった不満を持つ中間層の間で、反ディアスの地下組織網が形成されていった。

外国資本とともに特権を享受し、おおいに恩恵を蒙っていたアシエンダの大地主は、この時までには二極化の傾向を示していた。ひとつは進んだ外国資本の大土地経営の方法を見習い、鉄道の発展に伴う交通網の整備や市場の拡大に対応して、より効率のよい生産システムに切り替えていったアシエンダで、労働条件の改善もある程度進行した。もうひとつは一般の保守的なアシエンダ・グループで、時代の要請にあわせて近代的な経営を試みたり、流通機構を改革して市場の動向に素早く対応するよりも、メキシコ市やヨーロッパでぜいたくな生活を送るのに忙しかつた連中である。こういったグループに属するアシエンダのペオンたちは、旧来の極貧状態のままだった。

しかし外国資本による鉱山や大農園への進出が顕著なものになるにつれ、これらの鉱山や農園はてつとりばやい労働力確保の手段として、時には一般のアシエンダの十倍以上の給料を払って労働者を集めた。国際的な市場を持つ海外資本は、それでも能率よく運営できれば十分もうかつたのである。数世代にわたって借金に拘束され、現在の生活も食うのにやつとの状態で、

未来に何の希望も持てないペオンたちが意を決して家族を引き連れて逃亡し、こういった外国資本の経営する鉱山や農園に潜りこんでも、もし成功すれば十分見返りのあるものだった。もともと生命以外何も持てなかった人たちのだから。外国資本の経営する鉱山や農園は、ディアスの意向を反映して治外法権的特権を持っていた。したがって、一旦逃げ込んだペオンたちを連れもどすのはアシエンダの領主といえども難しかった。こうしてアシエンダの領主たちと外国資本の経営者は、しだいに反目するようになってきた。

外国資本による第一次産業のマーケットは、国内よりも国外の方が大きかった。ということは、国際経済の動向に直接影響を受けやすくなったということである。一九〇六年にコーヒー恐慌がブラジルを襲つたのを皮切りに、一九〇七年にはアメリカ合衆国の経済がおちこみ、その影響が国際市場にはねかえり、果物、木綿、サイザル麻、タバコなどメキシコ産品の国際価格は下落した。アシエンダは打撃を蒙つたが、とりわけ影響の大きかったのは、近代的経営を目指して借金をしながら体質改善を図っていたアシエンダで、厳し



「アシエンダを視察する領主とその妻」
 画集「考古学的絵画的主題を求めての旅」
 収録、カルロス・ネベル、1834年頃、リトグ
 グラフ、メキシコ国立図書館蔵

くなった銀行の取り立てににつきもさつきもいかなかった。ディアスはこれに対して何の救済措置もとれなかった。アシエンダの近代化に批判的だった保守的なアシエンダ経営者と、寡占体制をさらに強めようとする外国資本の圧力があつたからである。

要するに、独立百年祭を盛大に祝っているその時点では、ヨーロッパかぶれしたディアスにも、また彼の取り巻き連中にも、誰もが愛想を尽かしていたのだった。しかし大分もうろくしてきたとはいえ、ディアスの権力はまだ強かった。大統領選挙で彼の獲得した投票数がまったくのたためであることはいうまでもないが、そういう操作をする余力は残っていたのだ。かくして革命という道が選択されるようになる。

メキシコ革命

一九一〇年十一月二十日にメキシコ革命は始まる。

だが、この日に民衆が一斉に武力蜂起したとか、ディアスが政権の座から引きずりおろされたというわけではない。この日は大統領選挙に立候補したフランシスコ・マデロが選挙直前に不当逮捕された折、牢獄から反ディアス勢力の結集を呼びかけ、その一斉決起に指定した日であった。この時点で呼びかけに応じたのは少数のゲリラ・グループだけだったが、この日を契機に様々な英雄、悪役、端役が歴史の舞台に登場し、それぞれの役を演じていった。

政治改革から社会革命へ

北部の大地主たちの利益を代弁するパスクワル・オ



「演説するフランシスコ・マデロ」、ホセ・ガダルルーベ・ボサダ、1910年頃、木版画、国立芸術院蔵

ロスコ、軍の指揮官としては有能だったが革命の意義をまるで理解せず、反革命的に動いたビクトリアーノ・ウエルタ、菜食主義者で精神力は強いが政治力に乏しかったマデロ、農民の夢を現実のものにすべく疾風のようにモレロス州を駆けめぐり、アシエンダを襲うエミリアーノ・サパタ、豪放で陽気な性格から万人に愛され、今でも伝説に、詩に、歌に語りつがれる、チワワ州から北上しようとしたパンチョ・ビリャ、強力なヤキ族のインディオを引き連れ、最後には労働者や農民を組織化するのに成功するアルバロ・オブレゴン、自らは地主でやや前時代的であったが、自由と独立という高い理想のために戦い、何よりも外国の干渉を嫌うメキシコ人の心情を代弁したベヌスティアノ・カランサ、アメリカ合衆国の利益を確保しようと反革命の糸を引き、逆に失脚してしまうアメリカ合衆国大使ヘンリー・ウィルソン等々。だが真の主役は、それまで銃も剣も持ったことのなかった農民であり、インディオであり、労働者であった。そしてディアスの独裁体制への反発から始まった自由主義的な政治革命は、こういったもつとも抑圧された階層の人々を巻きこむ

ことによって、やがて社会経済構造を根底から変革する社会革命へと発展していった。

メキシコ人のためのメキシコ

一般に一九一〇年から一九四〇年までの時代が革命時代と認識されている。このうち最初の十年間が革命の動乱期、一九二〇年以降が制度的変革のプログラムを実行してゆく期間と理解されている。このメキシコ革命動乱期の十年間は、さらにマデロ、カランサ、サパタ、ビリヤなどの革命諸勢力、それにウエルタ等の反革命勢力の利害と野心が複雑に交差し、武力闘争と革命の到達点をどこに設定するかという議論が錯綜した最初の五年間と、改革のプログラムを具体化してゆく段階に入った後期の五年間に分けられる。この後期の象徴的な成果が、一九一七年の憲法制定である。

一九一五年一月、首都メキシコ市の制圧に成功したカランサは、その年の秋までに国土のほぼ九〇パーセントを掌握する。この過程で明らかになってきたのは、革命勢力のうち、弁舌よりも行動を好み、執務室に座って政務を取るより野や山をかけめぐることに才能を

『メキシコ市に凱旋の後、大統領の椅子の下にすわるパンチョ・ビリヤ(左)とエミリアーノ・サパタ(右)、1914年12月6日、メキシコ市チャプルテペック城 国立歴史博物館蔵』

発揮し、何よりも最下層の人々の心を代弁するサパタやビリヤと、本質的には支配者であり、政治的かけひきを心得ていたカランサやオブregonとの対立である。歴史のパラドックスとして興味深いのは、結局ビリヤやサパタは政治の舞台からは退けられ、最後は暗殺されてしまうのだが、逆に政権を握ったカランサやオブregonが、負けたはずのビリヤやサパタの改革の理念を実現してゆかねばならないはめに陥ったことだろう。

革命動乱期を通じて明らかになってきたことは、メキシコという国民国家にはインディオも含めた国民像の形成が必要なこと、国民の大多数を占める農民の利益を要求する民族意識が十分に育ってきたということである。この民族意識は、植民地時代末期から独立期にかけて目覚めたクリオーリョたちの国家観とかメキシコ人意識とは異質なものである。近代化のモデルを西欧型工業社会に求め、国土を外国資本に売り渡してまで西欧至上主義を貫いたディアスへの反発から生れたメキシコ革命は、また西欧型の近代化には邪魔になるとされた伝統的な村落共同体や土着のインディオ文化を再認識し、メキシコ人のアイデンティティの一部



とすることであつた。だがこのことは、植民地時代以前のインディオ世界にまで戻ることでもなければ、三世紀にわたる植民地時代を否定するものでもない。メキシコ人の自己認識の原点を、インディオ世界と西欧世界の混血するメステイソという性格に求めたということである。

この意味でカランサがいかに進歩的な姿勢を取りつづけようと、時代おくれの十九世紀的国家意識しか持ち合わせていなかった。政治的な嗅覚をもつてこの事態を把握したのはオブレゴンである。オブレゴンは労働組合と農民連合の組織的な支持を受け、カランサを追放するとともに、一九二〇年、大統領に就任する。こうして一九一七年憲法を現実に適用する政治プログラムを実行する時代に入ったのである。

メキシコ革命動乱期に民族意識の形成を促した他の要因としては、アメリカ合衆国の武力干渉やドイツの武器供与があつた。なかでもカランサは、一般のメキシコ人の心情を代弁すべく、あらゆる外国の干渉を露骨に嫌悪した。それは、ベラクルス港封鎖のように革命軍に有利な申し出であっても、政敵であるビリヤに

対する討伐軍の派遣であつても変らなかつた。この点では対立する革命勢力同士も一致して反米、外国勢力排除の姿勢をとり、メキシコ人としての民族意識を高揚させる結果となつた。

壁画運動は、メキシコ革命の過程で明確に形成されてきた、このような新しいタイプの民族意識を高揚する文化活動であり、革命を国民全体の共有財産として歴史の中枢に刻みこむ作業であつた。それと共に、長らく文化的な支配を続けてきた西欧に対する、メステイソ文化の挑戦でもあつたのだ。

革命の芸術

メキシコ革命の中心になつて動いた人々は、ディアスの独裁制の時代に生れ育つた人々であり、ディアスによつてもたらされた繁栄の恩恵を理解すると同時にその限界も見極めた人々であつた。メキシコ革命は単

なる政治革命ではなく、社会改革であると共にメキシコ独自の文化体系を再構築しようという意図も持った、文化革命であった。ディアスの採用した西欧工業化社会を指標とする近代化路線は、メキシコを西欧化することを目的とした。そのため極端な外資導入政策がとられ、その利益がディアスと彼を取り巻く一部の上流階級の人々に集中したため、大多数のメキシコ人のナシヨナリスティックな心情を刺激し、反発を生んだのだ。ディアスの政策の骨格を形成したのは、コントの実証主義を実践しようとするシエンティフィコと呼ばれる人たちであったが、ディアスに対する反感はこういった思想的な面にまで向けられた。たとえディアスを追放したとしても、それが単なる政権交代でしかなかったならば、何も解決しないだろうということが次第にはつきりしてきたのだ。

新しい思想の模索

こうして文化人の間では、実証主義哲学に代わる思想の模索が始まる。実証主義の内容がどのように優れたものであれ、メキシコではディアスの不正と大多数

の国民の貧困を生み、独立戦争を通じて獲得した民族意識、そして人間が人間として存在する権利までを抑圧する機能しか果たさなかった。ディアス時代に生れ育った文化人たちはこの事実をはっきりと見定め、新しい社会の基盤となる思想——ナシヨナリズムを高揚し、人間性を回復し、実証主義に代わるもの——を一斉に追求しはじめた。その組織的な動きはディアス政権の末期、一九〇〇年から十年の間にあらわれてくる。美術作家、文芸作家、思想家、評論家などの若い知識人の動きが活発になってきた。革命は知識人にとっても必然的な結論だった。そして必要であれば、自らも武器をとったのだった。

大事なことは、この時点で突然新しい時代を象徴するような芸術が生れ、壁画運動に集約されていったというわけではないことである。少なくとも美術に限って言えば、十九世紀末から二十世紀初頭、そして一九二〇年代の壁画運動へと向う動きは、それまでの流れとの断絶ではなかった。時間の幅を短くとも独立達成以来、美術作品の制作の現場で日々作家が悩み、そのなかから見出してきた表現の帰結でもあったのだ。

壁画運動の核心に触れる前に、もう一度、十九世紀から二十世紀に至るメキシコ美術界の様子を辿ってみよう。

II

壁画運動の先駆者たち

可能になったものである。

アカデミアの歴史

アカデミズムとアカデミアの問題

メキシコに最初の美術アカデミアが設立されたのは、一七八五年のことである。植民地時代の頂点にあったこの時期、経済力の面ではラテンアメリカ植民地でも群を抜き、本国スペインと肩を並べるほどに成長したとの自負が、人々のなかに生れていた。しかし、同じスペイン語を話し、カトリック信仰を共にしてはいるものの、文化面ではいまだ本国並みには達していないと感じていた。この分野では、まったくの輸入過剰であったのである。しかも、大西洋をわたるぶんだけ遅れてはいってきたし、量も限られたものだった。メキシコにおけるアカデミアの設立は、文化面で西欧と同等の水準を求めるこうしたメキシコ人の心情と、世界の歴史は西欧を中心に形成されてゆくという、西欧自身の自負に基づいた文化拡張の欲望が重なりあって、

スペイン王室は一七〇〇年以来、それまでのハプスブルグ家支配からフランスのブルボン家支配へと移っていた。有能なフェリペ五世（在位一七〇〇～四六年）につづいて、フェルナンド六世（在位一七四六～五九年）、カルロス三世（在位一七五九～八八年）の治世がつづく。この期間に、スペイン宮廷の雰囲気はフランス風に変っていった。そして当時のフランス宮廷美術文化を支えていたのは、アカデミアの作家たちであった。十六世紀以降、ギルドとは別の美術教育を提供するようになっていたアカデミアは、ギリシャ時代以来ルネサンス期までつづいた伝統から変質し、組織と規範を持つようになり、その基準に達した人々だけが会員になれるシステムをとるようになる。そして十八世紀になると、王立施設として機能するに至る。

スペインで最初のアカデミアが設立されたのは一七五二年のことで、マドリッドにアカデミア・デ・サン・フェルナンドが創設されたのを皮切りに、一七五

三年にはバレンシア、一七七五年にはバルセロナ、一七七八年にはサラゴサと相次いで設立された。十八世紀後半には西欧中で百以上のアカデミアが生れたとされている。

ラテンアメリカでは一番早く、一七八五年に設立されたメキシコのレアル・アカデミア・デ・サン・カルロスには、マドリッドやバレンシアのアカデミアですでに教鞭をとっていた現役の美術作家が招かれた。では、アカデミアの教育とはどのようなものだったのだろうか。

アカデミアの美術規範は古典主義に依っている。つまり、ギリシャ、ローマ時代の作品を理想美の規範として、まずこの美の水準に達すること、そしてこの理想美を西欧文化の古典として次の世代に伝えてゆくことにあった。このため一般にはアカデミアの美術を総称して〈新古典主義〉とか〈アカデミズム〉とよぶ。

典型的な教育プログラムとして、遠近法、素描、解剖学、幾何学、建築学などがあり、技術修得のために、版画（まだ油絵を描くための下絵の性格を残していた）、そしてギリシャ、ローマの彫像からかたどった石膏モ

デルのデッサン、および生きたモデルを使った人体デッサンなどの授業があった。こうして現実の社会とは無縁なギリシャ、ローマ時代、そしてやはりギリシャ、ローマ美術の復権の意味を持つルネサンス時代の作品が模倣され、現実にはめったに存在しないプロポーションと骨格や顔立ちをもつ人物像を配した美術作品が制作されていた。

ギリシャ、ローマという過去の遺産を共有しないメキシコで、しかも国民の大多数がインディオというメキシコで、古典美術を自らの美術表現として受け入れるという奇妙な現象が生れたわけだ。だが、この新古典主義は純粹に美術の問題として受け入れられたというよりも、社会的な要請だったという面を見落としてはならない。

新古典主義とフランス文化崇拜

西欧においては宮廷文化の担い手として発展した新古典美術も、メキシコでは独立をめざす新生メキシコの文化の指標となったのである。ここに至る背景には大きく二つの理由が考えられる。ひとつは、十八世紀

に頂点を究めたバロック様式の美術に誰もが見飽きてきたことである。そしてこのバロック美術は、どんなに素晴らしいものであろうとも、植民地文化の象徴であり、独立をめざすメキシコには否定すべき過去のものとなったのである。こうしてバロック美術を悪しきもの、反古典的なものとして退ける新古典主義の立場に共鳴する傾向が強まった。極端な例としては、バロック建築物や美術品の打ち壊し運動が展開されたりした。そこまでゆかなくとも、建物の内外装や、華美一色のバロック式レタブリが、しばしば新古典主義様式の物に置き換えられたりした。

そしてもうひとつは、フランス革命の勃発である。人民の蜂起から憲法の制定という一連のプロセスを、メキシコ人は自分たちのこれからとるべき道の先駆的なモデルとして見ていた。この意識はすぐに、フランス文化の崇拜の念へと拡大してゆく。そしてフランス美術を支えてきた新古典主義をとりいれることこそ、フランス人のように自由と独立を達成し、メキシコ人の文化的基盤を築く早道だと考えたのだ。そこには、新古典主義がフランス社会で実際に果たした役割につ

いて検討するほどの余裕と理解力はなかった。

アカデミア教育の矛盾

メキシコにおけるアカデミアの活動は、こうしてギルド職人制にかわる唯一無二の美術教育機関として活発になり、新古典主義様式の作品が都市のモニュメントとして、公共施設の装飾として、また個人の肖像画として制作されるようになった。肖像画の場合、モデルとなった人からは、その顔立ちも衣装も現実の姿とはかけはなれた西欧古典の意匠で描かれたわけだが、描かれた人はそれが自分の理想の姿、将来のメキシコ人のあるべき姿を写す鏡として受け止めたのだ。

しかし、独立を達成するという政治過程のなかで、その独立の精神的表現として考えられた新古典主義は自己矛盾に陥る。非西欧社会におけるアカデミアの教育は、西欧の美術文化の正当なものをいまだへ西欧化へされてない国に伝える啓蒙的精神に支えられていた。

このため、アカデミアの教師はまず西欧人でなければならず、どのように才能のあるメキシコ人が、どれだけ長く修練を積んでも、主任教授として教える立場に

立つことはなかった。またあらゆる自己表現も、テーマの選定にあたっては、古典の規範から離れることは許されなかったし、教師たちに既知の西欧の歴史のつとつた題材でなければいけなかった。アカデミア教育は結局、西欧拡大の意図を助長し、非西欧社会の隷属化を推進したにすぎなかったし、そこで学ぶ生徒たちは、現実のメキシコ社会との対応を欠いた教養主義に陥ったのだった。したがって、独立を求めるメキシコの国民意識とは無縁なものとしてしか機能しなかったのである。

独立運動の過程で、敵対するスペイン本国は教師を引き上げさせ、その派遣をやめた。そして政治的混乱も激しくなったことから、アカデミアはついに閉鎖される。一八四八年にサンタ・アナ將軍の尽力によつてアカデミアは再建され、以後アカデミアはメキシコ革命の試練を受け、何度も教育内容や名称を変えながらも今日まで存続する。サンタ・アナはアカデミア再建にあたって、その中心となる教師を西欧から招へいたが、あくまで新生メキシコのアカデミアへの教師として、メキシコの美術を振興するために呼んだのだつ

た。そしてその教育プログラムも、また生れてくる作品も、新古典主義の理念を反映した以前のものとは異質なものに変っていた。

この新生アカデミアの変化に大きな影響を与えたのは、旧のアカデミアの閉鎖期間にほぼ対応して、メキシコのみならずラテンアメリカ中に渡来してきたロマン主義の波である。

ロマン主義とコスティブリスタ

ロマン主義のロマンという言葉の語源をたどっていくと、中世フランス語の俗語で書かれた騎士道物語のような文学を指していたらしい。やがてこういった文学に見られる伝奇、空想、至高の愛、精神的な理想の探究といった要素が強調されるようになって、ヘロマンティックな^①という形容詞が登場してくるのは十七世紀になつてのことであり、とりわけ自然賛美と感情表

現、夢想とか幻想、叙情的な光景の描写にこの傾向が示される。十八世紀になると、農村や漁村に対する都市の発展と、その都市における一部の上流階級の間の洗練され近代化されてはいるが人間性の疎外につながるような社会とか文化のあり方に反抗して、恋愛物や人生の苦悩を綴る自伝物や、さらに神秘主義と結びついた、理性や合理主義よりも感情や想像力を重視するロマン主義が生れる。ロマン主義は啓蒙思想とも結びつき、芸術をより自由な世界へと開放する革新的思想として、合理的普遍性よりも主観、既成の規範に追従するよりも想像力の優越を主張した。美術の分野においては、古典主義と対立するとともに、既成の社会体制への反抗と徹底した自我への執着という特徴が明らかになってくる。

十八世紀の後半になると、ロマン主義は多くの場合、国民的な国家統一の意識のもとに発達したナショナリズムと並行して発展するようになる。つまり美術においては、西欧共通の理想の美の形態としてギリシャ、ローマの古典的伝統があり、この美のみが普遍性を持つとする立場に対して、民族的、地域的、土着的、あ

るいは時代的な個性に積極的な美を発見していった。こうして古典主義の合理性に対抗する非合理的なものの追求、文明化された社会に対立する自然と、そのなかでたとえ貧しくても人間らしく生きている人たちの姿の追求、神秘的な世界へのあこがれと、その延長としてのエキゾティシズムやオリエンタリズムの追求といったことが、ロマン主義美術のテーマとなった。

したがって、ロマン主義は反古典主義という大まかな共通基盤はあるにせよ、それは、いわば精神のありようとか人生の基本的態度の表明であり、ゴシック様式やバロック様式などと同じような、ロマン主義様式なるものが存在したわけではない。新しい主題の発見がそのまま新しい美術の表現様式を生んだわけではなく、初期には、ロマン主義者たちも、自分が美術の訓練を受けたアカデミアの新古典主義の伝統技法を踏襲していた。

コストンプリスタがやってきた

西欧のロマン主義者たちは、こうして西欧には見られない珍奇なもの、めずらしいものの、未知のもの、よ



『闘鶏場の光景』、画集『メキシコの市民、
軍隊、聖職者の衣裳』収録、クラウディオ・
リナッティ、1928年、リトグラフ、メキシ
コ国立図書館蔵

り強い刺激を求め、冒険とロマンの旅にでていった。その活動範囲は、初めはアフリカや東洋であり、やがてラテンアメリカにも目が向けられるようになった。やがて十九世紀になると、ロマン主義者たちが大挙してラテンアメリカに渡来し、メキシコからアルゼンチンへ、ブラジルからグアテマラへといったように、一人の作家が植民地時代には考えられなかったスケールで旅をした。彼らは各地に滞在して、その土地の自然や、上流階級から一般大衆、インディオの日常生活を描き、さらにはジャングルのなかにうもれ、土地のインディオ以外はその場所も知らないほどに忘れ去られてしまったスペイン人到来以前の土着文明の遺跡を探検し、題材とした。こういった作家たちのことを、ラテンアメリカでは一般にコストンブリスタと呼んでいる。

アカデミアで教えるべく渡来してきた新古典主義者と違い、コストンブリスタは集団で行動したわけでもない、一貫した美術の教育システムや教育の場を確保したわけでもない。その態度も基本的には西欧社会に対して向けられたものであり、この点だけをとら

えれば、アカデミアの新古典主義者と同根ではあった。にもかかわらず、以後のラテンアメリカ美術の発展に大きく貢献する結果となったのはどうしてだろうか？

ロマン主義者が少なくない旅費をかけてまでラテンアメリカに渡航し、絵を描いたということは、損得を抜きにした個人的願望は別にして、そういう費用をかけても見合う程度の市場が、すでに西欧には存在したということだ。事実、コストンブリスタはラテンアメリカの風物や生活光景を描いては、タブローの形で、版画の形で西欧に送り、また解説を付けて、部数のかせげる画集の形で出版したりした。この事実、ラテンアメリカ人には驚きであった。アカデミアの教育では、西欧の普遍的価値である古典様式を模倣することこそ美術の唯一の方法であり、扱う主題も西欧の伝統のなかで生れた神話や聖書、歴史に由来するものに限定とされていたからである。美術の工房から足を踏み出し、誰でも目にする日常のラテンアメリカの風景や生活光景を美術の題材として描いていいものだとは思わなかったし、しかもそれらの作品がラテンアメリカ内ならいざしらず、西欧の市場で十分に価値を持つと

いうのは、考えられない事実であった。肌の色の違いや骨格の違い、食生活の違い、生活様式の違い、熱帯植物やめずらしい動物の存在といったものが、西欧から見て特殊であればあるほど、西欧人の好奇心をそそり、価値があることに、コストンブリスタたちは気づいたのである。こうして彼らの活動は、結果として、現地人のナショナルなもの自覚、自国のアイデンティティと結びつく風景の発見、独自の歴史によって発展形成されてきた個性的な文化と生活様式の積極的な評価、さらには遺跡の発掘を通じて、植民地時代以来無視されつづけてきた植民地時代以前の土着インディオ諸文明の価値の再発見へとつながった。

内発的な美術表現を求めて

コストンブリスタたちの存在は、独立時の国家意識、国民意識とあいまってきわめて重要であったが、同時に限界も存在した。彼らによって発見されたラテンアメリカの風景や風俗も、所詮は西欧人の目を通じて発見されたものであり、あくまで西欧人にとって興味深いものの、重要なものだけが扱われたわけで、メキシコ

人の美術作家が内発的な動機や表現衝動によって本来に欲するものを描いたわけではなく、メキシコ人美術作家にはまだ無縁な世界であった。もうひとつは、こういったコストンプリスタの動きが、独立を達成したメキシコの文化が西欧の独立諸国家と肩を並べるほどに成長した結果であり、そう認められたからだともメキシコ人を誤解させたこと、メキシコに必要な美術作品はこういった人たちによって賄われると思わせてしまったことだろう。この意味でアカデミアの新古典主義教育と同様、形こそ違え、あくまで西欧による世界支配の欲望の一形態を表明したものであることには気がつかなかった。

アカデミアにおいては、いくら修業を積んでも究極的には自立の道を閉ざされ、また階級社会や職業的制約があつて外国人コストンプリスタのように自由気儘な旅も生活も許されなかったメキシコ人美術作家は欲求不満な立場に置かれたわけだが、それでも徐々にメキシコ的な美術表現の道を模索しはじめる。そしてその突破口は、意外な方向から登場してきた。メキシコ市の美術に対する地方のプリミティビズム、あるいは

素朴画とよばれる系譜の作品である。

素朴画の系譜

一七八五年、メキシコ市にアカデミア・デ・サン・カルロスが創設されて以来、プエブラ市やグアダハラ市といった地方の主要都市にもアカデミアの分校が設立されるようになっていった。こういった分校では、基本的には新古典主義の教育がなされたわけだが、教師の実力はメキシコ市のアカデミアに比べて概して劣っていた。そもそもメキシコ市のアカデミア・デ・サン・カルロスにしても、きわめて高尚な理想に燃えて渡航してきた第一世代の講師たちが帰国し、世代が変るにつれ、本国のアカデミアではあまり通用しないような二流の美術作家たちが講師として送り込まれるようになってきた。そのころには、ペルーのリマ市やエクアドルのキト市などラテンアメリカ各地にもアカデ

ミアが設立され、講師の絶対数が足りなくなり、二流といえども受け入れなければ必要な講師数を確保できなくなっていた。ロマン主義の台頭によって、才能ある人ほどかつてのように新古典主義に魅力を感じなくなってきたことも、教員不足の背景としてあった。

地方のアカデミアでは事態はもっと深刻だった。せっかく地方の有力者の肝煎で実現したアカデミアだが、肝心の教師がそろわなかったのである。こうして地方のアカデミアは、メキシコ市のアカデミア・デ・サン・カルロスで学んだメキシコ生れのクリオーリョたちの絶好の就職先ともなった。しかし又聞き之又聞き……と新古典主義の規範が伝えられてゆくに従って、たとえば同じ遠近法の扱いにしても細部については甘いものになったり、主題や題材の扱いにしても正当的な解釈とはずれた勝手な解釈になりがちだった。

新興の美術愛好者たち

結局、新古典主義の正当的なものと照らしあわせて評価できる人も、論じあう美術家仲間も、地方にはきわめて少なかったのである。だが地方の美術品購買者

『喫煙するメキシコ農村の女性と牛飼いの男』、画集『考古学的絵画的主題を求めての旅』収録、カルロス・ネベル、1834年頃、リトグラフ、メキシコ国立図書館蔵

であったブルジョワ層には、様式上の正当性などあまり大きな問題ではなかった。何よりも、獲得した富と栄華にふさわしく邸宅を飾ったり、教会に寄付したりする美術作品の絶対数が足りなかったのである。またこういう地方のブルジョワにとって、西欧の伝統に準拠しているだけの、彼らにとってまったくわけのわからない作品よりも、どこかに自分たちの親しんだ風景や人物の顔、植物、果物、動物がすこしでも登場したり、また華美な装飾性のあるものの方が親近感をもてたのだ。地方のアカデミアの存在は、その教育内容が徐々に変質していったとはいえ、それまでほとんどチャンスがなかった地方の在住者にも美術教育を受ける機会を増やし、またわざわざメキシコ市まで出かけたリ、法外な価格に比してつまらない輸入品を待たずとも、手軽に作品が手にはいるシステムを築いたことで評価できるが、この遺産をメキシコのナショナルな表現やメキシコ人の感性にぴたり合うものに変えていったのは、非アカデミックな美術作家たちであり、日曜画家というような人たちであった。この点に言及する前に、コストンプリスタの果たした役割について、



さらに述べてみよう。

コストンプリスタたちはもとと、人間性を疎外してゆくような都市生活には、あくまで西欧との対比で面白いものか、金銭的な目的で上流階級の人々の肖像画を描く以上にはあまり興味がなかった。それよりも地方を旅行し、珍しい風物や庶民の生活を観察したり、ピラミッドなど古代土着インディオ文明の遺跡を発掘したり、あるいはまだ紹介されたことのないインディオ部族を訪れたりというような、冒険心や知的好奇心を満足させるものの方に興味を持った。このため地方にあつては、あらゆるものが題材となった。果物や野菜、地方色豊かな衣装、アシエンダの支配者からペオンに至るまでの生活、闘牛や男女の交際、賭けごと、酒場の様子、街の物売り、子供の遊び、お祭りや各種の行事等々、どれも西欧人の目には素晴らしく面白いものだった。また地方に住むメキシコ人にとつても、馬の上で、街角で、野原で、酒場の一角で、あるいは台所の片隅でスケッチする画家の姿は、また印象的なものだったろう。

『聖母に感謝する一家』、エルメネヒルド・ブストス、1879年、銅板に油彩、国立芸術院蔵、奉獻画

日曜画家と素朴画の誕生

決定的に大きかったのは、絵を描くという作業には西欧の歴史や西欧古典の知識はかならずしも必要でないこと、信仰があれば聖書図像学の知識もいらなし、愛と悲しみを知っていれば肖像画を描くのに解剖学の知識もいらず、山や川の発する自然の音が聞こえれば遠近法の知識もいらないということがわかったことである。すなわち、人生のなかで出会う楽しいことや悲しいこと、怒り、信仰の告白を何かに表現して残しておきたいという衝動、美しいとか素晴らしいと感じ心に満ちた感動を何かに記録しておきたいとき、絵具と絵筆を取れば絵が描けるという簡単な事実を、コストンプリスタの活動を通じて認識したことだ。こうして、かならずしもアカデミックな訓練を受けたわけでもないければ、初めから美術作家をめざしたわけではない日曜画家のようなひとが、積極的に絵を描きはじめ、発表していった。そしてその頃にはまた、そういう感動を共有したいと考える観客、すなわち購買層が成立していたのである。



こういった絵画を一般に素朴画と呼んでいる。素朴画を扱う主題や目的でさらに分類すれば、ボデゴンと呼ばれる静物画、家庭用の祭壇に飾ったり教会への寄進の際に奉納する奉獻画と呼ばれる宗教画、家族や知人、それに依頼のあった人のために描いた肖像画、それに風景画などにわかれる。重要なことは、メキシコ人がメキシコ人の肖像やメキシコの風景、日常生活や風習を描くことにためらいを感じなくなったことだろう。そしてこの傾向は、西欧崇拜の呪縛が少なかった地方の生活のなかから発展していった。ここに初めて、大衆性を獲得したメキシコ国民の絵画が誕生したことになる。

絵画のメディア性をとりあげて考えた時、十九世紀後半から大衆の間で重要な役割を演じるようになってきたのは、いわゆるグラフィック・アートの分野である。そしてこの分野から、後の壁画運動の理論を構築するのに重要な指針を与えたホセ・ガダル・ペ・ポサダが生れたのだった。

グラフィック・アートの貢献

グラフィック・アートとは、一般に版画をはじめとして、大量印刷をも可能にする現代のあらゆる印刷術を使った芸術表現と定義される。今日では公共デザインや企業のPR活動と結びついた視覚的表現の意味が強くなってグラフィック・デザインという概念となり、さらにマス・メディアとのかかわりの過程で領域が広がり、視覚情報を中心とするビジュアル・デザインという概念に置き換えられる。その一方で、日本ではよりアートの個人的表現を強く残すものにはイラストレーションという言葉を使って区別しようとしている。しかし、マス・メディアがまだ今日ほど発展していなかった二十世紀初頭までは、木版画、銅版画、その他の金属版画、および石版画を指し、メディアとしてはポスターや新聞、本の挿絵や表紙、画集などがあった。

さらに範囲を広げれば、西欧やイスラム文化圏に古くからある装飾文字や、中国とか日本の書も含めることができる。

版画というジャンルの独立

版画は一般に水彩画と同じく、独立した作品として観賞されるようになったのは意外と最近のことで、だいたいい十八世紀も後半になってからである。言うまでもなく、これ以前に版画が制作されなかったわけではない。しかし、それまでの版画や水彩画は、あくまでタブロー画や建築・彫刻の下絵、あるいは本の文章の補助、壁紙や衣装のデザイン見本という位置づけしかなかった。アカデミアの教育でも版画は、油絵具で大画面のキャンバス画を描いたり、彫刻作品や建築、都市計画のイメージを固定する基礎的な技術教育のひとつであり、独立した講座として成立してはいたが、あくまで補助的なものと考えられていた。分業システムもはつきりしていて、原画を描くアーティスト、原画のイメージを版におこす彫師、紙に印刷する刷師などにわかれていた。これは日本の浮世絵の制作工程

に対応する。

しかし素描と同じく、美術作家はやがて、湧き上がるイメージを手早く、そして直接的に表現でき、しかも複製が可能であるという利点から自らも版を彫り、印刷工程にも手を染めるようになる。一方、彫師のなかにも他人の作品を注文通りに彫るだけでは飽きたらず、自らも自分のイメージを表現するようになる。こうした両者の歩み寄りにより、版画という独立したジャンルが成立していった。それと共に美術作品としての質も向上した。

美術の一ジャンルとして成立した版画に対して、十九世紀になると、とりわけその複製制作を可能にする特徴に注目が集まり、マス・メディアへの対応が考えられるようになった。ひとつには、素描のような自由な筆致と多彩な色の表現が可能な石版画の技術の発展という現象があり、たとえばフランスのロートレックが生み出したような芸術性の高いポスターが作られるようになった。もうひとつは、新聞のような活字メディアの興隆への対応である。そもそも活字メディアが多数の読者を獲得するためには、まず信じられないほ

どに低い大衆の識字率の問題を克服しなければならなかった。版画を使ったイラストレーションは、書かれた内容を字の読めない人に伝えるために不可欠なものとなった。社会的事件も政治的メッセージもイラストを通じて直接的に、そして素早く伝えられた。識字率の低い社会にあつては、新聞のイラストは、記事の補助というより、それだけで独立した機能を果たしたのである。

大衆が大衆を表現する

石版画はロマン主義コストンブリスタが愛用した技法である。各地を旅行するコストンブリスタたちは、重くかさばる大きなイーゼルやキャンバスを何十枚も持ち歩くわけにはいかず、必然的に軽い紙と手早く描けるグアッシュのような水彩絵具を携帯することが多かった。そして多くの場合、それら旅先で描いた水彩画をそのまま石版画の原画として使用し、西欧を中心に大量に売りさばいたのである。

コストンブリスタたちが意図的だったかどうかは別にして、各地を旅し、そこで繰り広げられる貧しいイ

ンディオの生活や、目にするメスティーソ階級の風俗を忠実に描いた作品は、客観的に見れば、富が一部の上流階級に集中するメキシコの政治批判を含んでいた。金属版による作品は耐久性に富んでいたため、新聞などのマス・メディアに多用されるようになる。こういった出版物の多くは社会で起きる様々な事件を解説すると共に、大衆の不満を代弁し、社会の矛盾を暴きだし、社会を変革するために、検閲や出版禁止の圧力にも体を張って対抗してきた。したがってその記事はもちろん、扱われる版画も社会批判や上流階級を戯画化したもの、貧しい人々の悲惨な生活を描いたものが多かった。そしてこれらの美術作家の多くは、大衆と同じ階級の出身者であり、アカデミックな訓練を受けたくとも受けられないような人たちであった。つまりここにおいて、メキシコの大衆がはじめて自分たちの姿、生活、主張を視覚的に表現する道を開いたといえる。

グラフィック・アートの分野での先駆者としては、メキシコではいわば辺境地であるユカタン半島の中心地であったメリダ市に住み、次々と発禁処分にあいな



「カラベラ(かいこつ)のカタリーナ」, ホセ・ガダルルーベ・ポサダ, 20世紀初頭?, 垂鉛版にビュラン直彫り:紙に印刷, メキシコ国立図書館蔵

がらもゲリラ的に大衆向けの新聞を発行しそのイラストを描いた、ガブリエル・ビセンテ・ガオナがいる。その活動は一八四七年に始まる。十九世紀後半になるとマニユエル・マニラがメキシコ市で活躍するようになり、大衆向けの新聞のイラストの他にコリドスと呼ばれる分野での挿絵を多く手がけるようになる。マニラは、後で述べるホセ・ガダルルーベ・ポサダと同じくバネガス・アロヨの出版印刷会社で仕事をし、ポサダに影響を与えた人である。

ポサダのカラベラ(かいこつ)シリーズ

ホセ・ガダルルーベ・ポサダは十九世紀後半から二十世紀のメキシコ革命勃発直後までこの分野で活躍し、生涯に一万五千枚以上の作品を残した。扱った新聞のタイトルだけでもざっと十一を数える。これはもちろん、発禁処分にあい、タイトルだけを変えて発行したものも含まれる。ポサダはこの他、マニラが開拓したコリドスの分野はもちろん、トランプ・カードの図案などグラフィック・デザインの分野でも腕をふるった。メキシコ市に定着後、ほとんどバネガス・アロヨと共



「カラベラ(がいこつ)シリーズ:ドン・キホーテとサンチョ・パンサ」, ホセ・ガタルーベ・ボサダ, 20世紀初頭, 亜鉛版にビュラン直彫り:紙に印刷, メキシコ国立図書館蔵

に働くようになった。この二人の出会いによって、美術を政治や社会批判のメディアとして扱う方法が確立した、といえる。これはスペインのゴヤやフランスのドミエに代表されるごとく、西欧では十八世紀以来、ひとつの伝統ジャンルになっていた。ボサダ自身下層階級の出身で、正規のアカデミックな美術教育を受けたわけではないが、その分、民衆の喜怒哀楽や様々な行事に対して共感できたのである。

ボサダは単に多作の故に、また鋭い政治批判の故に評価されたわけではなかった。彼はまたメキシコ独自の文化伝統を象徴するような、あるキャラクターを生み出したのである。それはカラベラ(がいこつ)と呼ばれるシリーズで、あらゆる人間、貴族であろうと聖職者であろうと貧民であろうと着飾った婦人であろうと、また動物であろうとも、すべてが「がいこつ」の姿で表す。これは過去に溯るとアステカ、あるいはもっと古くまで起源をたどることができる、生と死が表裏一体となつてあらゆる存在物を形成するという二元論的宇宙観の現代の復活であった。そしてこの種の表現を生む発想は、死生観こそ違え、「死の舞踏」に代表される

ように、また西欧にも存在したのだ。ここでポサダは、単にメキシコのみならず、西欧にも普遍的な表現を獲得するに至ったのである。そしてそれが、アカデミアの教育の成果ではなく、民衆の内発的な発想のなかから生れたことに意味がある。ポサダは、正規の美術教育を受けなかった大衆の一人として、同じ大衆の感じたことを代弁して描いた。それが大衆の圧倒的支持を受けると共に、世界に通用する言語表現を獲得したことで、その世界はまさに後の壁画運動が目指した目標と重なりあい、現在でも高い評価を得ている。

コストンブリスタたちによつて発見されたメキシコの風景や風俗の積極的価値、素朴画を通じて見出された、メキシコ人がメキシコの生活をあたりまえに描く楽しみと鑑賞する楽しみ、そしてグラフィック・アートによつて可能になった大衆側からのメッセージの表現、教育と啓蒙のメディアとしての有効性、こういったものが理論的に集約されて、やがて壁画運動が生みだされていったわけだが、この運動に至るまでにはまだいくつかの手続きが必要だった。十九世紀末からフランス、イギリス、ドイツ、イタリアなど西欧で次々

に展開されていった美術モダニズムの動きとの対応である。

III

モダニズムの洗礼

アカデミアの変貌

独立後の支配者階級のサロンを牛耳る婦人、知識人グループの要請を受けて、一八四八年にサンタ・アナ將軍は閉鎖されていたアカデミアを再開する。独立後の、メキシコ独自の文化を構築しようという機運のなかで、アカデミアのような美術教育と高尚な文化のシンボリック存在がないと、文化の空洞化を招くのではないかと不安にかられたのである。だが、再開されたアカデミアは、従来のアカデミアとまったく同じものではなかった。

西欧においても、またメキシコにおいても、いったんロマン主義を体験した人々は、教師であれ生徒であれ、また観客であれクライアントであれ、硬直化し、過去の規範にしがみつくだけの新古典主義にはもはやあきたらなくなっていた。彼らが崇拜するフランス文

化のなかにあって、新古典主義と対等の位置を占めるに至ったロマン主義に正当性を感じるとともに、新しい時代の息吹きをも読み取っていたのだ。

さらにもうひとつ、独立国家としてのプライドがあった。過去のアカデミアのように、西欧側の文化拡大の欲望がまずあって、それを受ける形で設立されたアカデミアとは違い、新生アカデミアはメキシコ人側の要請により、独立国家メキシコの文化の向上のために再建されたのである。したがって、こういった歴史的・政治的背景を抜きにして、西欧の古典主義の規範こそ唯一絶対のものであると繰り返し主張したとしても、もはや白けるばかりであっただろう。

新生アカデミアの誕生

サンタ・アナが招へいた講師は、こういった条件にぴたりともいえる人たちだった。このうち、画家であり、アカデミアの校長となるスペイン出身のペレグリン・クラベと、同じく画家でありメキシコ出身のファン・コルドロは良きライバルでもあり、ともに革命に至るまでのアカデミアの方向を決定づけた人物

である。

フアン・コルデロはローマのアカデミアで学んでいる時に誘いを掛けられたのだが、そのコルデロがローマへの置き土産に描いた作品はセンセーショナルなものだった。メステイソの若者を正面から主題として取り上げた『彫刻を学ぶ若いメステイソの学生』がそれで、今からみれば馬鹿馬鹿しいことだが、西欧内のアカデミアの新古典主義様式で描かれたメステイソの人物像としては、まったくはじめてのケースであった。この作品は、非白人の血が混じった人物が主題となったということの外に、独立したとはいえ、長らく植民地であった非西欧国の人間が、いわば西欧の精神の中核を形成してきた古典主義を学んでいるということ、はじめて西欧内で公にしたということで画期的だったのだ。こういった実績と共にメキシコにやってきたコルデロはまた、当時西欧ではすたれてきた壁画の伝統とフレスコ技法を幾つか手がけ、メキシコ人の上流階級の肖像画も多く描いた。これらの肖像画の構図は、古典主義の規範に沿い、また金、銀、プラチナであしらった豪華な衣装や装飾品を着けているにも

かわらず、色の使い方や形態の生真面目な表現にある種の土臭さ——メキシコの感性と言い換えてもいい——が感じられる。

一方のペレグリン・クラベはスペイン出身で、ローマのアカデミアで学び、やはりローマのアカデミアで教えた後にメキシコに渡って来たが、きわめてセンティメンタルでロマンティックな感性を備えており、時代の求めていた資質に適合していた。クラベは旧約聖書主題を得意とする一方、新古典主義の典型的主題として伝統のある神話画、歴史画の分野に、メキシコの植民地時代以前の、インディオ伝統世界からモチーフを求めた。これにより、メキシコ人がわけのわからない図像の象徴的意味にわずらわされることがなくなった。しかも彼らは、独立後のメキシコ文化に対するアイデンティティも獲得したのである。

しかし、主としてクラベの弟子たちによつて進められたこの折衷的な方向は、今日の評価からすると、袋小路に入りこんだ誤った方向であったとされる。古典主義的に理想化された容姿のインディオたちが、劇場仕立ての構図のなかに設定されることが多いが、イ

ンディオはまるでギリシャ神話のアポロやミューズのように表され、バナナの木一本出てこない背景を含めて、現実に目にするのできる環境とは無関係な、密室の工房の作品になってしまったのである。

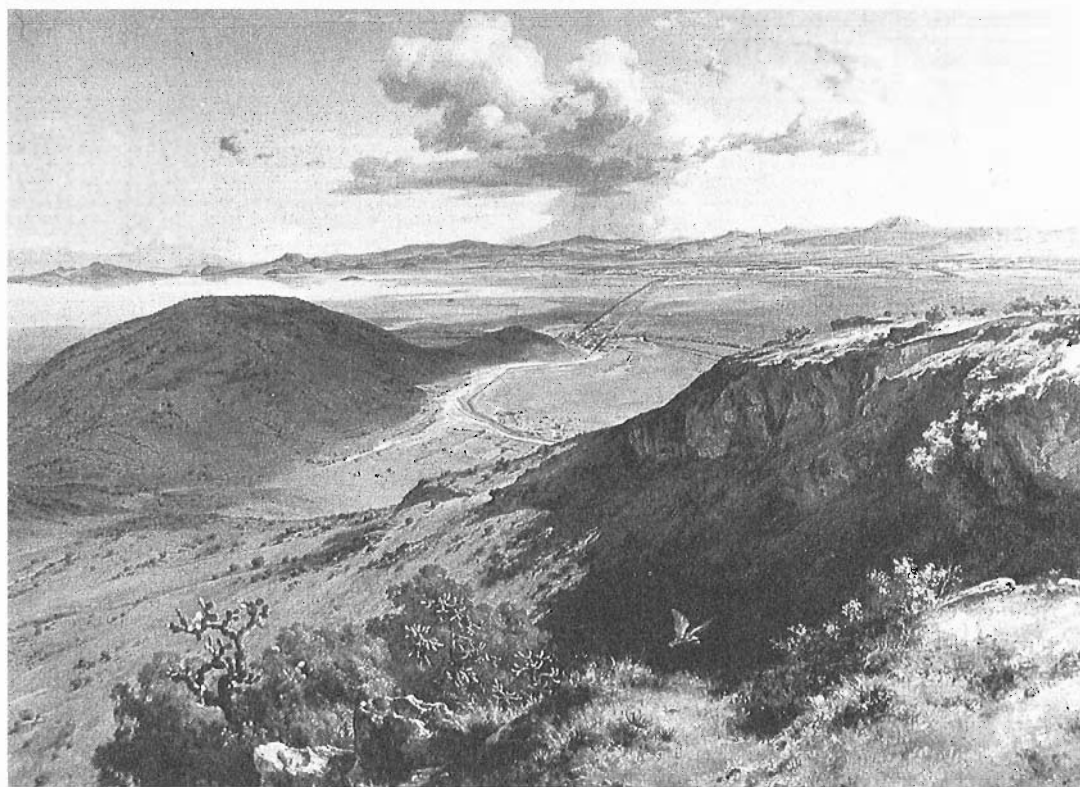
風景画によるメキシコの発見

クラーパーの時代にはまた、アカデミアの教育の変革も行なわれた。神話画や歴史画、宗教画に対して、一般に世俗画と呼ばれる分野にたいする社会的な要請は、もう否定できないほど強くなっていた。世俗画のジャンルには風景画、肖像画、静物画などが含まれる。アカデミアの教育のなかでは、風景や静物、動物の描写はあくまで聖書主題や神話、歴史的事件の表現を明確にするための副次的なモチーフであり、それ自体で独立した画面を構成することは許されなかった。しかし、西欧においてもメキシコにおいても力を持ってきた新興ブルジョワ層の趣味を反映し、またロマン主義者が好んだ世俗のモチーフはやがて独立したものとして扱われるようになり、アカデミアのなかでも他と対等の、独立した科目として教えられるようになる。

「メキシコ峡谷の風景」、ホセ・マリア・ベラスコ、1877年、キャンバスに油彩、155×225cm、メキシコ国立近代美術館蔵

こうした環境のなかで、風景画の分野からきわめて傑出した美術作家が登場する。クラーパーに誘われ、メキシコのアカデミアで教えるようになったイタリア人の風景画家エウヘニオ・ランデシオのもとで学んだホセ・マリア・ベラスコである。

ベラスコの貢献は、コストンブリスタにかわってメキシコ人として自らの国を描くために旅行した先駆者であるとともに、その風景画が単なる風景画に終らず、メキシコの歴史を象徴するような風景描写に昇華されたことである。たとえば、遠くに噴火山を望む広大なメキシコ峡谷の風景画面の手前の岩山に視線を注ぐと、サボテンの樹があり、その上で鷲と蛇が争っている。全体がきわめて自然に描かれているため、一般の人には珍しい光景の一瞬をとらえた完成度の高い作品と鑑賞できる。それとともにメキシコ人、あるいはメキシコの歴史について知識のある人なら、この風景画がアステカ帝国建国の故事とそれ以後のメキシコの歴史全体を象徴するものとして認識できるのだ。つまり新古典主義のような教条的理想化の手段によらずとも、メキシコの風景を、メキシコの歴史をただ自然主義的に



描くことによつて、世界に通用する普遍的な感動を生む表現に到達することを証明したのである。そして、メキシコを描くこととそれが世界に普遍的な価値を生むといった関係こそ、後の壁画運動が目指した表現であつたのだ。

アカデミアの限界

刻々と変化する社会の動きに対応すべく、アカデミアも変貌してゆく必要にかられていた。しかしそのスピードは遅く、最終的には教師個人の資質に負うところが多くなり、必然的に古典主義の呪縛は弱いものになる。作家の主観性、個人の表現、規範よりも、興味や個性に重点がおかれるようになった状況は、まさにロマン主義が求めていた環境であつた。アカデミアはその存続を図るために、元来受け入れられないはずのロマン主義の生き方に活路を見出さざるを得なかつたのである。革命直前までのアカデミアの姿を象徴的に示すのはフリオ・ルエラスで、世紀末の象徴主義やアール・ヌーボーと深くかわつていた。あらゆる意味でアカデミアの古典的教育は、基礎技術の修得の面を

除いてはもう限界に達していた。そしてこの頃、西欧においてもアカデミアの使命は終り、様々な反アカデミズムを標榜するモダニズムの運動が、美術の世界を揺り動かしていたのだつた。

美術モダニズムへの対応

ディアスの独裁が続いた時代、西欧崇拜、特にフランスへのあこがれが強かつたディアスの影響で西欧文化の最新情報が取り入れられ、また多くの留学生が海を渡つた。彼らがそこで体験したのは、様々な主張を折り込んだモダニズムの動きである。モダニズムの動きはすべて、反アカデミズムという点で一致していた。印象主義、新印象主義、後期印象主義、アール・ヌーボー、ラファエル前派、社会主義リアリズム等々……。こういつた多彩な動きのなかでもまれた若い留学生たちは、ある決断を余儀なくされた。

ひとつは西欧に留まり、創造の世界の最先端をいく当時の現代美術の作家たちと競争しあひながら、自己の才能とチャンスに賭ける道である。孤独であり、失敗すれば単なるデラシネで終る可能性もある。また国際的な市場を目標にするために、常に自らを鼓舞してゆかねばならず、より若い世代への教育的配慮やメキシコ美術の国内事情とは無関係でいられないにしろ、いつもそちらに目を向けているわけにはいかない。しかし成功すれば世界的な名声を手にすることができ、ひいてはメキシコ国家の文化的地位を引き上げることになる。

もうひとつは、ある程度西欧の動きを吸収したところで、その留学の本来の使命通りメキシコに帰国し、祖国の啓蒙に努める道である。そもそも留学できること自体エリートであることの証明であるから、帰国すればそれなりの地位は約束されていたわけだし、小さいながらも安定した国内美術市場が望めた。問題はその先だった。西欧モダニズムの動きをメキシコに伝え、教育し、さらにメキシコの美術を西欧化する道は、まさにディアスをはじめ彼を取り巻く上流階級の望むと

ころであり、現実には保守的なディアス体制を強化しこそすれ、根底的な革新にはなかなかつながらなかった。事実、生活のためにこの道を選んだ美術作家、建築家も多かった。

留学生たちの選んだ道

しかし、真の意味で次代を担うべく西欧の留学先から戻ってきた若い創造的な美術作家たちは、実はもうひとつの道を選んだのだった。なるほど、モダニズムの様々な表現方法は刺激的である。しかし歴史的、社会的背景までを西欧と共有するには無理のあるメキシコ人にとって、いくら自分の感性にぴったりだと思える主義主張と表現方法であっても、所詮は内発的な動機に支えられていたわけではなく、それは学習の成果でしかなかった。たとえば印象主義の革新性は、目に見える外界の事象や事物はそれらから発する光の反射によるものだという新しい認識の方法と、その光をいかに色に置き換えるかという問題から点描に至る表現技法をもたらしたことにあるが、そこでメキシコ人が描く対象、題材までを西欧のなかから選ぶとすれば、

それはもう単に西欧作家の描く西欧の絵にいかにも近づくかという問題であり、いかにメキシコ人にとって内実のあるものにするか、という問題ではなくなる。世界に通用する普遍性を持つと思われたモダニズムの思想を吸収したうえで、さらにメキシコ的であることを実現するには、まずメキシコのなから題材を選ぶことに始まると考えたのである。それも外国人の目ではなく、あくまでメキシコ人の目によってである。

アカデミアのなかからホセ・マリア・ベラスコが試みた、メキシコ的なものの発見と同じアプローチを、表現方法こそ違え試みたのはホアキン・クラウセルである。クラウセルはメキシコ中を旅行し、印象主義風の解釈で風景を描き続けた。

メキシコの的な題材を求めてゆくと、必然的にメキシコの大多数を占める農民やメステイソの生活、あるいはインディオの存在を無視できなくなる。西欧崇拜にこりかたまったほんの一部の上流階級の生活風俗は決してメキシコ的な姿であるとは言えないからだ。市井の人々の生活の物語を描き、美の多様性、つまりあらゆる人間の生活のなかに美術の対象となるテーマが

『海岸の岩』(上)、ホアキン・クラウセル、1911年、キャンバスに
油彩、96×108cm、ハリスコ州立美術館

『奉納品』(下)、サトゥルニノ・エラン、1913年、キャンバスに
油彩、183×210cm、メキシコ国立近代美術館蔵

潜在的にあることを証明したのは、メキシコのゴギャンと呼ばれるサトゥルニノ・エランである。その画風、原色あざやかな色彩の処理、単純化された構図、素朴で地方的、あるいは下層階級からとった題材などの特徴は、ゴギャンの総合主義と対応するところがある。しかしゴギャンの場合、ヨーロッパ文明を否定して原始と未開美術の精神を発見するためにタヒチにまで行ったわけだが、エランの場合は母国メキシコのなかでそれを発見できたのだ。鮮やかな白色の木綿の上着、藁帽子の間から見える浅黒く疲れきった顔としなびた腕、眉毛の濃いぼちゃとした若い女性の一瞬の華やかさの周りに置かれる、これも鮮やかな黄色をしているが死を象徴するセンポアルソチトルの花、といったエランの描き出した光景は、未開の生活を賛美するために描かれたわけではなく、メキシコの民衆生活の光と影をあばきだすためであった。それはメステイソの美の発見とともに、虐げられた民衆の真の姿だった。そしてエランの描く人々が主役となるメキシコ革命は、もうすぐそこまで来ていたのだ。



新しい芸術を求めて

二十世紀初頭になると、ディアス独裁政権時代に生れた若い世代の知識人たちが力をつけてきた。この人たちの思想的な共通認識は、実証主義哲学は結果として大多数のメキシコ人大衆を貧困から救うことはできず、一部の特権階級の不正と腐敗を拡大再生産してきた、その過程であらゆる人間の根源である人間性ですら否定され、今では限界まで達している、というものである。こうして思想や哲学の分野では、実証主義にかわる新しい思想や哲学を模索するようになる。

ディアスに対する反発は、彼の崇拜する西欧に対して向けられる。欲望を剥き出しにしてメキシコを支配しようとする外国資本の後ろに控えるのも、また西欧の列強国である。対抗する手段として、この新しい世代の知識人・文化人は、まずナシヨナリズムを追求し、

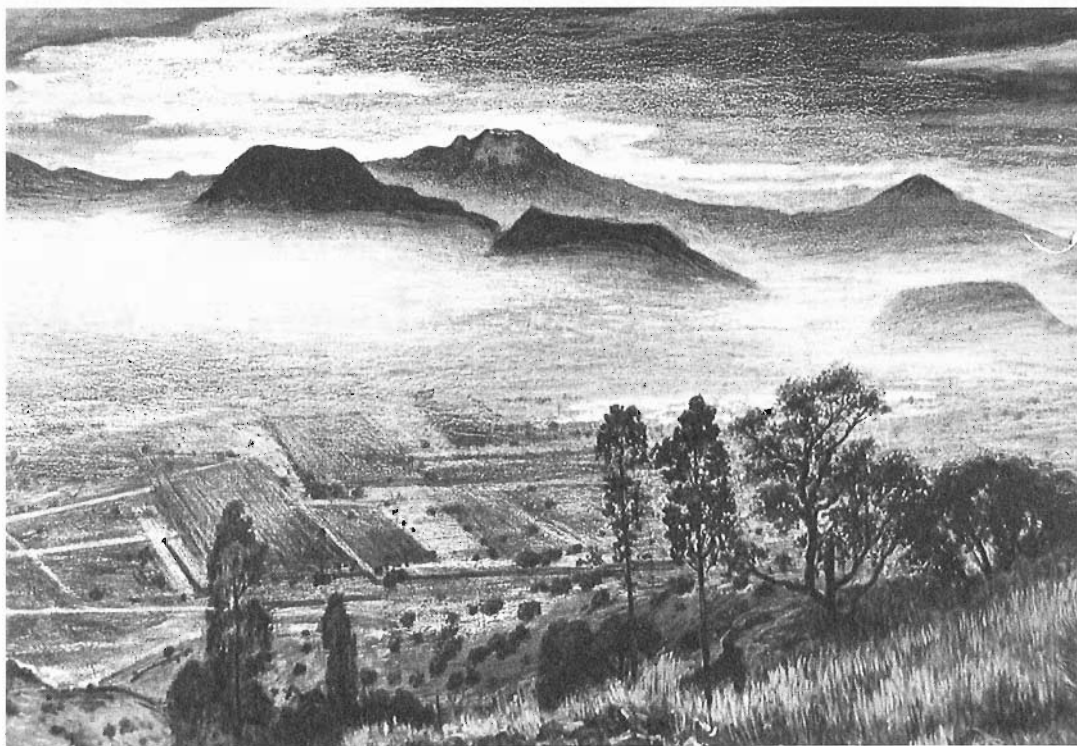
「メキシコ峡谷にそびえる噴火山」、ヘラルド・ムリリオ(ドクトル・アトゥル), 1916年, 厚紙にテンペラ, メキシコ国立近代美術館蔵

独立運動時代よりもさらに広範囲の国民を巻き込んで民族意識を高揚する手段を考えようとした。

美術の分野では、アカデミアのなかから、ロマン主義者のなかから、モダニズムのなかから、地方の素朴画のなかから、はたまたグラフィック・アートのなかから、それぞれの分野で明確になってきたある方向性——それがある共通した認識に由来することに気がついたかどうかは別に——をひとつのコンセプトに集約してゆく必要性を感じ始めていた。つまり、どのような美術ジャンルに属する人も等しく、メキシコのナシヨナルな表現、外来のお仕着せでない内発的な表現を求め、メキシコ独自の文化伝統とアイデンティティを持ちうる美術を創造しようとしたのだ。そして革命に至る時期、メキシコの革新を考える美術作家たちを組織化しようとして動いたのが、ヘラルド・ムリリオである。

ドクトル・アトゥルの登場

ムリリオは一九〇四年にヨーロッパ留学から帰国すると早速、芸術家の組織化と今までにない作品の発表



のシステム、金もなければ文字も読めない一般大衆でも美術を学ぶことのできる教育システムを考えるようになる。だがこの段階では、まだ壁画運動は構想されることも日程に組み込まれることもなかった。ムリリヨ自身は風景画の分野で新しい方法を試みる。当時としてはまだ非常に珍しかった飛行機や飛行船に乗って、空中からのメキシコ峡谷の風景を描いた。空中から見ると、地上からは一番遠く、また一番小さく見える山頂の部分が、逆に一番大きく見えるという逆転現象が起こる。ムリリヨはこういった方法によって制作された作品を、〈空中遠近法〉による作品と称していた。このように新しいメキシコの風景の発見に近代機械文明の力を利用する方法を示す一方、探検家・冒険家として、コストンプリスタたちの活躍した当時の装備、交通手段、知識では手をつけることのなかった秘境や、布教の情熱に燃えた宣教師が植民地時代に足を踏み入れたものの、以後すっかり歴史の舞台から忘れ去られたような奥地のインディオ部落などを訪れ、新しい風景の発見に努めた。日本の昭和南山のように二十世紀になって突然できたミチョアカン州のバリクティンと

いう噴火山には特に興味を示し、そのダイナミックに火を吹く雄姿を連作に描いた。

ムリリヨはメキシコ古代インディオ文明の研究にも着手し、やがて自らドクトル・アトゥルと自称するようになる。〈アトゥル〉とはアステカ人たちの使っていたナウアトル語で〈水〉という意味だが、この名にこめられた意味は、さらに三世紀頃からメキシコ盆地を中心にメソアメリカを経済的、宗教的に支配したテオティワカン文化の最高神であった、水と農耕の神トラロックの直接の子孫であることの表明であり、またメキシコ盆地が今日見られるような埋め立てが進められる以前の、まだ大部分が湖であった頃からの正当な住民であることを象徴的に示しているのである。ここにおいて、ディアス政権時代に進められた西欧的な近代化の過程では忌まわしき過去、滅ぼさねばならない非近代的な文化要素であった土着インディオ文明の存在が、百八十度方向を変え、積極的に価値あるものとして扱われなければならないことを示したのである。

メキシコの過去の再発見

ムリリヨはその一方、近代文明に対する興味とメキシコにふさわしい美術の模索の過程から、メキシコの姿を表現するのにふさわしい絵画材料があるはずだということに着目する。たしかに一般に使われる油絵具もキャンバスも西欧の伝統のなかから生れてきたものであり、またこういった表現と展示のシステムは結果としてメキシコの上流階級の所有欲を満足させ、教会堂や大邸宅内の装飾の道具として機能してきたわけで、メキシコの土着伝統とも大多数の人間の生活とも無縁な形式であつたといえる。化学の方面での研究の結果、ついにガソリンを溶剤とする絵具の製造に成功する。これはアトウル・コロールと名づけられ、特許を取ると共に意匠登録もする。速乾性のために野外での風景画制作が素早く行なえる外に発色が鈍く、メキシコの乾いたザラザラとする風景を、あたかも画面のなかから土ぼこりが舞うように土臭く表現するには適していた。この色感、以後のメキシコ風景画の一典型として今日まで伝えられている。

植民地時代以前の土着インディオ美術と同様、ムリリヨはまた植民地美術にも積極的な価値を見出していた。西欧の亜流と見られ、また土着の職人の手が加わつたため正当性がないとされた植民地美術の、まさにインディオの伝統的感性が表明されてしまつた部分、メキシコの大地と環境、そこに住む人間のために西欧美術の伝統が変形歪曲されてしまつたまさにその部分に、意味があるとしたのである。これもまた、それまでの美術研究の方法やそれを支える価値観を百八十度ひっくりかえすものだった。それまでの美学美術史研究者の典型的な方法は、まず最低三種類から四種類の西欧言語で書かれた原典が確実に読みこなせるほどの知識を身につけ、そのうえで西欧美術と美学の理論を研究するというものだつた。唯一西欧の美術・美学こそが世界の美術を普遍的に語るものだという神話を、誰も疑わなかつたのだ。したがってメキシコ人の美術研究者は、まず何にもまして西欧に留学した。そして自国の美術遺産にはほとんど目を向けることはなかつた。

ムリリヨは考古学の分野で古代の遺跡の発掘や保存

を奨励する一方、いわゆる美学美術史研究者に対しては、西欧ではなく植民地時代を中心とした自国の美術遺産の研究の必要性を説いた。そしておそるおそる国内を旅し、資料を蒐集し始めた若い研究者に対しては、調査の方法や資料の集めかた、豊富な旅行経験に基づく面白い調査対象などを積極的に伝授したのである。

この結果、十六世紀のコルテスに始まるスペイン人の征服やメキシコ国家独立という政治的な区切りとは別に、古代から二十世紀に至るまで、まさにメキシコ的と呼べるような文化表現の継続性が確認されるに至ったのだ。つまりメキシコの独立は単なる政治的な課題だったのではなく、メキシコ人の文化へのアイデンティティが独自のものであることを明らかにしたものであり、その基層部を支えたのは、今は社会的に虐げられているインディオやメステイソであったことがはっきりしたのである。

組織者としてのムリリヨ

組織者としてのムリリヨの能力も卓越したものであった。一九〇四年に新設された国立芸術院の使用方法和

「革命の兵士」、フランシスコ・ゴイティア、
1916年頃、キャンバスに油彩、メキシコ国
立近代美術館蔵、メキシコ人の手によっ
て初めて描かれたメキシコ革命の絵

内装の装飾に関するコンセプト作りに参画する。この時点では、後の壁画運動ほど明確な主義主張があったわけではないが、壁画のアイデアがはじめて提示された。一九〇六年には政府の公共施設を、自分を含めて若い美術作家の作品の展示に使わせることに成功し、一九〇七年には「自由な芸術の旗とともに」と題して、若い芸術家、知識人を集めた大集会を開いた。さらに一九一〇年、独立百年祭を盛大に祝いたいディアスの気持ちを利用して、やはり百五十人近い美術家、建築家、文芸作家、音楽家、文化人を集めた一大イベントを開催した。そこではっきりしたことは、ディアスの政権にも文化政策にもこれ以上の存続を望む者はなく、真に創造的なメキシコ独自の芸術を自らの手で作り上げてゆこうということだった。そしてこの高揚した声はまだ静まらないうちに、メキシコ革命に突入する。

革命の動乱期、ムリリヨの立場は微妙なものだった。もともとエリート階級の出身であったムリリヨにとつて、いくらインディオやメステイソに同情しようとも、またメキシコ固有の伝統文化に理解を示そうとも、根底的な社会改革までは考えていなかった。彼はサパ



タやビリヤよりも、カランサやオブレゴンに親しみを感じていた。事実、革命以前からムリリオの活動を支援していたのはオブレゴンであった。しかし、革命のプログラムが進行してゆくに従つて、ムリリオはカランサ支持へと動く。

やがて誰もが革命の覇者たろうとするために危険になつた首都メキシコ市を脱出し、オリサバの町に若い信奉者を引き連れて移住する。このグループのなかには、後で述べる壁画三巨匠の一人、ホセ・クレメンテ・オロスコもいた。ムリリオはオリサバ市で学校と工房を開くと共に、出版物の発行や美術作品を通じて独自の革命支援運動を展開する。また壁画の有用性についても主張した。しかし、革命の動乱期がすぎ、オブレゴンが中心となつて改革のプログラムが実行されてゆく段階に入つた時、ムリリオの存在は、その党派性の故に二度と歴史の舞台に戻ることはなかつた。

革命の芸術と芸術の革命

歴史の皮肉というか、しかし、美術の改革に関するムリリオの行動や主張のほとんどは、壁画運動の綱領

と実践のなかに生かされていた。一番大事なことは、真にメキシコ独自の美術表現を求めるならば、それは単に革命を賛美し、革命に奉仕する「革命の芸術」というだけではいまだ不十分であり、西欧中心に動く現代美術に対する「芸術の革命」でなければならぬ、ということがはつきりしたことである。

また歴史とは、過去に起こつたこと、あるいは過去に起こつたことの知識や物語だけを指すのではない。現在起こりつつあること、現在発生している現象までも含まれる。メキシコ革命という、現在発生し、進行するこの歴史的な事件を絵画というメディアを使って記録し、自己の表現世界を開拓していったのはフランシスコ・ゴイティアである。メキシコ国民が自らの歴史を自らで築こうとする行為を現在の目で同時進行的に評価すること、それは歴史から過去を学ぶことより未来に向けて新しい歴史が生成されていることを認識してのことである。メキシコの場合、この態度は必然的に、革命以前の西欧による価値観や認識の分野での過大な呪縛の糸を、ひとまず断ち切ることであつた。

ゴイティアは革命の動乱期、自ら革命の一兵士とし

しても通りぬけなければいけない「芸術の革命」というプロセスの存在が明らかになったのだ。

て身を投じ、銃や剣を取ると共に、同じ兵士やその家族、兵士と共に行軍し食事やセックスその他の面倒を見るソルダダたちの生活、戦闘の場面などを、自らの体験を通して描いた。もともとアカデミアの教育を受け、リアリズムに徹した表現と油絵の技法に類いまれな才能を示した人だった。しかし一度革命に従事し、血を流すメスティーソやインディオの姿を描くときは、情念のほとばしるまま革命の歴史が形成されてゆく一瞬一瞬を表現主義的に描き出していった。もはや絵画は、一部の上流階級の慰みや教会堂で神の栄光を賛美するものではなく、また西欧のモダニズム美術をひたすら追従し消化することによって西欧と対等の文化水準に達したことを証明する小道具のひとつでもなくなった。メスティーソやインディオといった人民が、真に自らの国家と呼べるような世界を創ろうとするナシヨナリズムの高揚と対応し、彼らの戦う姿、革命の過程で発生する様々な悲しみや喜びを描き、美術作品として成立させると共に、歴史の記録としても残るような絵画が誕生したのである。ゴイティアにおいても、ここに「革命の芸術」という側面と、そのためにどう

これはオロスコに続くリベラの死去、長期化したPRIの一党独裁政権下で露見してくる腐敗の実態、というものがその根拠となるが、実際にはすでに述べたように、メキシコにおける壁画制作のブームは一九六〇年代になつてのことである。岡本太郎がメキシコで壁画を制作したのも一九六九年のことである。この六〇年代からメキシコ美術に魅せられ、日本とメキシコを往復しつつ、日本での壁画制作やメキシコ美術の紹介に今日まで精力的に活動しているのが利根山光人であるが、利根山が求めるメキシコ美術の魅力とは、その土着的な原始的表現のパワーに尽きる。

一九五〇年代以降の文献を検討してみると、壁画運動そのものについて述べられたものは意外と少ない。さすがにシケイロスやリベラ、オロスコとの個人的な接触に基づく記述から壁画運動に触れていることはあるが、ジャーナリスト的な扱いに留まるものが多い。ということとは、結局メキシコの壁画運動が日本の近代洋画の世界に一度としてまともに紹介されたことはなかったことになる。壁画運動がメキシコ革命と密接であつたことから、一九三〇年代の日本のプロレタ

リアート美術との接点も考えられることだったが、日本のプロレタリアート美術が生活の現実から浮き上がって存在し、その主張もアジェーションとプロパガンダに終始しており、また西欧の美術運動にしか目が向かなかつたため、実際にアメリカやメキシコで壁画運動や壁画制作を体験した作家たちとの交流はほとんどなかった、と見るべきだろう。

にもかかわらず、日本における壁画や壁画運動という言葉に対する一般の認識度は、結構高いように見受けられる。おそらくこの理由は、壁画運動が理屈抜きに、私たち日本人が求めてやまない、ロマンに満ちた現代の神話のような存在に思えるからだだろう。

あとがき

メキシコの壁画運動って一体何だったんですか？

そんな素朴な疑問に対して、日本には十分な資料もなく、また満足のゆく回答も用意できない状況が、もうかなり長い間続いてきた。ラテンアメリカ美術のみならず、現代美術にすこしでも興味を持つ人ならば避けては通れないテーマのはずだが、最近では話題にのぼることも少ない。

世代がかわってきたとはいえ、美術をとりまく現実がそれほど変わったとは思えないのに、本来語るべき人は皆疲れてしまったのか、あるいはもう語ることもなくなったのだろうか。メキシコの経済や政治の情報は、その内容が貧弱なものであれ、また微量ではあるにせよ、それでも継続的に入手できるのに対し、この国の美術情報が日本に伝わることはほとんどない。壁画運動は、もはや過去形で語られるべきものになっってしまったのだろうか。そんな疑問も、実際にメキシコやヒスパニック系住民の多いアメリカ合衆国を見て、壁画や壁画を必要とする人たちの様子を知ると共にお

きてくる。一方ではニュー・ペインティングを体験し、大画面、表現的な作風、技法の革新や社会とのかかわりあいへの志向を深める日本の一部の若い世代の人々は、そのひとつの指標としてメキシコの壁画を学ぶために渡航する例も増えている。しかし、その際に参考となるような、日本語で書かれた入門書の類いはこれまでなかった。

本書はその間のギャップを埋める意図を持ってまとめたものである。もとよりメキシコ観光を考える一般の人たちの案内書としても利用していただければ幸いと考えているし、第三世界の近代化の問題、とりわけ文化面での相克を、側面から語る資料のひとつとして読んでいただければ、とも思っている。

国際政治や経済、そしてその他の学問分野では、とうに第三世界の民族や国家、開発、戦争と平和、エスニシティーなどといった問題が避けて通れないものだという認識が強まっているにもかかわらず、美術の世界ではあいかわらず西欧主義一辺倒で近代の呪縛から自由になれないでいる。この環境のなかでオロスコやリベラ、シケイロスは単にアメリカ合衆国でも壁画を描いたというだけで、アメリカ合衆国現代美術の文脈でもっともらしく語られてしまってもいる。げに文化植民地主義（それも西欧受け売りの）は続いていると

いうことであろう。いつになったら我々は、自らのまなざしで世界を公正に見ることができるようになるのだろうか。まあ、こういった話題は暗くなるばかりなので、別の機会に譲ろう。

日本には「メキシコ党」、あるいは恥ずかしげに「隠れメキシコ党」を自称する一派が存在するらしい。実際のところ、壁画運動についてほとんど知らなくとも、シケイロスやオロスコ、リペラの名前くらいは知っているという人は多い。昨今のエスニック料理ブームの流れでメキシコ料理も注目を浴びているが、この背後でメキシコ党が影響を与えているかどうかまでは定かではない。もちろん私も乞われれば是非黨員に加えていただきたいと思っている一人である。メキシコ党のルーツを探ると、どうやらそれは一九五五年に開催されたメキシコ美術展辺りにあるようだ。残念ながら一九四九年生れの私にはこの体験がなく、テレビで見たメキシコ・オリンピックが、メキシコを意識した最初だろう。メキシコ革命の話にしても、ロシア革命などと違って、泥臭くはあるが人間のロマンティックな営みを彷彿させ、日本の都市生活ではすっかり忘れ去られたような、ほこりと血と汗にまみれながらも何かを成し遂げてゆく情熱のほとばしり、のようなものを感じ

るのである。これもメキシコに魅せられる理由のひとつだろうか。

私個人について言えば、実際にメキシコやラテンアメリカの美術に興味を持ちはじめたのは一九七〇年代に入ってからであり、その動機は、当時の日本における現代美術の状況の見え方と決して無縁ではなかった。この辺りの経過についてはすでに他の本に書いたので割愛させていただくが、いまだに抱えている問題として、美術の「共同表現」の可能性というテーマがある。この意識はさらに、ロシア構成主義やアメリカ風現代美術との比較検討という今後の展望にもつながっている。本書のテーマからはややはずれるが、執筆にあたって——最近のレトロ・ブームを反映する現象とも言える——このところ再評価の動きが顕著になってきた新古典主義（これは美術市場での、主として売手側のニーズが反映されていることは疑いない）とアカデミアが第三世界で果たした役割について、短いながらもまとめることができたのは予期せぬ結果であった。ロマン主義についても同様である。

最後になってしまつて心苦しいが、本書の刊行にあたってお世話になった皆様方に心からの謝辞を述べさせていただきます。とりわけ、出版社との仲介の労を

とつていただいた猪瀬直樹氏には感謝する次第である。写真の整理から原稿の編集まで一貫しておつきあいいただいた平凡社の関口秀紀氏には、なみなみならぬお世話になった。

一九八八年は日本―メキシコ修好通商条約が締結されてちょうど百年目にあたる。様々な行事が催されるなか、本書が刊行される運びになったことは非常な喜びである。今後の日本―メキシコ間の文化理解と交流促進にすこしでも役立てば、それは筆者のいちばん願うことでもあり、読者の皆様への何よりの貢献と考えている。

昭和六十三年六月

東山湖畔にて

加藤薫

メキシコ壁画運動 現代図書バージョン出版によせて

長らく絶版となっていた拙著を、復刻版という形で再び世に出していただいた現代図書とそのスタッフの方々にまず感謝いたします。編集部の井上節子さんにはとりわけお世話になりました。

平凡社から初版が出版されてから十五年の歳月が流れ、この間にメキシコの社会状況もかなり変化しました。二〇〇〇年七月のメキシコ大統領選挙では国民行動党(PAN)候補ピセンテ・フォックスが勝利し、実に五四年に及ぶ制度的革命党(PRD)の一党支配の時代が終わりました。メキシコ革命のバラダイムも変わっています。

この十五年間に、世界に誇る二十世紀の一大遺産であるメキシコ壁画は危機的な状況に陥ってしまいました。古い建造物の取り壊しに際し、移転処置など出来ないまま消滅する壁画の数は増え、環境悪化による壁画の劣化速度が早くなっているにもかかわらず、修復作業は遅々として進みません。経済問題の影響をもろに受けています。メキシコへの航空運賃も安くなったし、壁画を見る

なら今しかないよ、と叫びたい気持ちで一杯です。

一方、明るいニュースも幾つかあります。これまで記録そのものが無かったり、記録はあるのに実物が無かったという壁画が新たに十数点も発見されました。その中にはホテル・デ・メヒコが世界貿易センターに再生されて以来、行方不明となっていた故岡本太郎氏の作品も含まれています。

私事になりますが、本書第Ⅵ章に記述のあるチカーノ(文中でチカーノと表記)の歴史や壁画作品などを別の単行本(『21世紀のアメリカ美術チカーノ・アート 抹消された「魂」の復活』、明石書店)の形でまとめることができました。本書と合わせて御覧いただければ幸いです。

復刻出版という性格から、本文については最低限の校正以外ほとんど手を加えていません。大きな変更点としては文中のカラー写真を白黒写真に変え、装丁を並製にしました。

この結果、初版出版時より廉価で配布することが可能となりました。失うのもより得るものの方が大きいとの判断ですが、読者の方々の評価を待つ次第です。

平成十四年十一月

加藤 薫

作家：リベラ, シケイロス

1955

ミチョアカン州立博物館(モレリア市)

作家：アルフレド・サルセ

穀物公営市場(グアナフアト市)

作家：ホセ・チャベス・モラード

1956

ミチョアカン州政府庁舎(モレリア市)

作家：アルフレド・サルセ

1957

国会議事堂

作家：ホルヘ・ゴンサレス・カマレナ

1958

国立中央病院

作家：シケイロス, ホセ・チャベス・モラード, ルイス・ニシザワ, フランシスコ・スニーガ他

1962

グアダハラハ市役所(グアダハラハ市)

作家：ガブリエル・フローレス

1964

バイーア総合スポーツ施設

作家：マニュエル・フェルゲレス

国立歴史人類学博物館

作家：タマヨ, ホセ・チャベス・モラード, ラウル・アングィアーノ, アルフレド・サルセ, リナ・ラソ, アルトゥロ・ガルシア・ブストス, アルトゥラ・エストラダ, マティアス・ゴエリッツ, レオノーラ・カーリントン, ファニー・ラベル, レギーナ・ラウル, ラファエル・コロネル, ルイス・コナルビナス他

1966

国立歴史博物館

作家：オロスコ, シケイロス, フアン・オゴルマン, ホルヘ・ゴンサレス・カマレナ, ホセ・チャベス・モラード, フランシスコ・デ・パウラ・メンドーサ他

1968

ポリフォルム・クルトゥラル・デ・シケイロス

作家：シケイロス

メキシコにおける主要な壁画年譜(1921～1968)

1921～22年

旧コレヒオ・マキシモ・サン・ペドロ・イ・サン・パ
ブロ(現国立第二中学校)

作家：ロベルト・モンテネグロ、ハビエル・ゲレロ

1922

ボリバル講堂

作家：リベラ、フェルナンド・レアル

国立高等学校

作家：オロスコ、シケイロス、ラモン・アルバ・デ・ラ・
カナル、フェルミン・レプエルタス、ジャン・シャル
ロット、エミリオ・ガルシア・カエロ、フェルナンド・
レアル

1923

文部省

作家：リベラ、アマド・デ・ラ・クエバ、ジャン・シャ
ルロット

1925

国営電信公社ビル(グアダハラ市)

作家：シケイロス

1927

チャピング国立農業学校

作家：リベラ

1929～1935

国立宮殿

作家：リベラ

1934

国立芸術院

作家：オロスコ、リベラ、シケイロス、タマヨ、
ホルヘ・ゴンサレス・カマレナ他

1935

ロドリゲス市場

作家：パブロ・オイギンス、アントニオ・ブホル、
マリオン・グレース・グリーンウッド他

1936

国立版画工房

作家：レオポルド・メンデス、パブロ・オイギンス他
グアダハラ大学講堂(グアダハラ市)

作家：オロスコ

1937

ハリスコ州政府庁舎(グアダハラ市)

作家：オロスコ

1939

電気労連ビル

作家：シケイロス、ルイス・アレナル、アントニオ・
ブホル、ホセ・レナウ他

カバーニャ病院(グアダハラ市)

作家：オロスコ

1941

最高裁判所

作家：オロスコ、ホルヘ・ピドル

1943

ヘスース病院

作家：オロスコ

1948

国立師範学校

作家：オロスコ

ブラド・ホテル

作家：リベラ、ミゲル・コバルビナス

1949

ハリスコ州議会議事堂(グアダハラ市)

作家：オロスコ

1952～56

大学都市

作家：リベラ、シケイロス、ファン・

オゴルマン、ホセ・チャベス・モラード、フランシス
コ・エッペンズ

1953

SCOPビル

作家：ファン・オゴルマン、ホセ・チャベス・モラード、
ロセンド・ソト、ホルヘ・ベスト他

1954

社会保険庁第1号地区病院

メセグエル Benito Messeguer
 サントス・カセレス
 Juan Santos Cáceres
 バルデラマ・アナヤ
 Enrique Valderrama Anaya
 1962年 ベセルル Jesús Becerril
 ガリンド Gilberto Galindo
 ランダ Manuel Landa
 1963年 セニセロス・レイエス
 Guillermo Cenicerós Reyes
 セルバンテス Pedro Cervantes
 クエバス・ゴメス Iván Cuevas Gómez
 メンディアルドゥア Fitzia Mendialdúa
 オルディアレス・フィエロ
 María Teresa Ordiales Fierro
 ロメロ Benjamín Romero
 サンチェス Fernando Sánchez
 サッフェ Guillermo Zapfe
 1964年 アルバレス Ernesto Alvarez
 カネッシ Federico Canessi
 カーリントン Leonora Carrington
 ファルコン Adolfo Falcón
 ゴンサレス Maximiliano González
 ララウリ Iker Larrauri
 マテオ Jerónimo Mateo
 メシアック Adolfo Mexiac
 モレノ・カプデビラ
 Francisco Moreno Capdevila
 プラド Nadine Prado
 タラゴ Leticia Tarragó
 トレホ Antonio Trejo
 1965年 アバスカル Amelia Abascal
 アリス René Alís
 アレリャーノ・サフル
 Mario Arellano Zajur
 プロイシン・ラモス
 Francisco Broissin Ramos
 サスエタ Zazueta

1966年 ラミレス・アレリャーノ
 Gilberto Ramírez Arellano
 1967年 ベネデット Silvio Benedetto
 グリア Angela Gurriá
 ベラスケス Hugo Velázquez
 1968年 ベルトラン Alberto Beltrán
 カステリャーノス
 Eduardo Castellanos
 エスコベド Helen Escobedo
 フリーデベルグ Pedro Friedeberg
 シルバ José de Santiago Silva
 1969年 岡本太郎 Taro Okamoto
 レイエス・エルナンデス
 Abelardo Reyes Hernández
 壁面に日付の記録がないため、このリストからもれた作家たち
 アルバレス Rosa Alvarez
 ベルトラン Amelia Beltrán
 セルナ・マイトレナ Jesús Cerna Maytorena
 クルス José Cruz
 ゴイティア Francisco Goitia
 ゴンサレス・フェンテス
 Carlos González Fuentes
 ゴンサレス Frank González
 ガネーリ・イタルゴ
 Raymundo Guagnelli Hidalgo
 ハミルトン・オニール
 Elaine Hamilton O'Neill
 マリオ・メディーナ Alfonso Mario Medina
 モンロイ José Atanasio Monroy
 ポルティエーリョ Gabriel Portillo
 ロマン Vicario Román
 サラス Manuel Salas
 セグラ Juan José Segura

(オルランド・S・スアレス著「メキシコ壁
 画運動の調査」をもとに筆者編集)

モラ Francisco Mora
 ロハス Fermín Rojas
 スノ José Guadalupe Zuno
 1954年 カノ・ガルシア Teodoro Cano García
 デルガード María Elena Delgado
 エステバン Rubén Esteban
 ゴエリッツ Mathias Goeritz
 マルティネス・アルテツチェ
 Héctor Martínez Arteche
 マルティネス Norberto Martínez
 1955年 アブンディス Armando Abundis
 カルディナリ Giulia Cardinali
 チャベス・ベガ
 Guillermo Chávez Vega
 ホフマン Kitzia Hofman
 ウエルタ Elena Huerta
 メンデス María Teresa Méndez
 ムーニョス・メディナ
 José Muñoz Medina
 スアレス・オルベラ
 José Suárez Olvera
 ペラスケス Raúl Velázquez
 1956年 アクーニャ Roberto Acuña
 チャベス・カリリョ
 Jorge Chávez Carrillo
 ディアス Carlos Alberto Díaz
 ガスコン Elvira Gascón
 ゴンサレス Guillermo González
 ニールマン Leonardo Nierman
 ピント James Pinto
 プラッツ Ramón Prats
 ラウル Regina Raul
 レイエス・メサ José Reyes Meza
 1957年 ポリバル Angel Bolívar
 カルデロン Edmundo Calderón
 カリオン Enrique Carrión
 エルナンデス Daniel Hernández
 エルナンデス・デルガディリョ
 José Hernández Delgadillo
 エレラ Telésforo Herrera
 ホフマン・アイゼンバーグ
 Herbert Hofmann-Ysenbourg
 ヒメネス Sarah Jiménez
 フラド Carlos Jurado
 オルドーニェス Efrén Ordoñez
 オソリオ Trinidad Osorio
 ピーニャ・モラ Aarón Piña Mora
 サンチェス Carlos Sánchez
 トーレ・ガンボア
 Ermilo Torre Gamboa

トリリョ Héctor Trillo
 ペラ・サネッティ José Vela Zanetti
 1958年 アルバラン・イ・プリエゴ
 José Albarrán y Pliego
 アルバレンガ José "Tuno" Alvarenga
 アラゴン・バリャダール
 Luis Aragón Valladar
 ブラボ・モラン
 Guillermo Bravo Morán
 コバルビアス Luis Covarrubias
 マタ José de Jesús Mata
 メサ Guillermo Meza
 ベレス・コロナード
 Manuel Pérez Coronado
 サラス・セニセロス
 Manuel Salas Cenicerós
 シルバ・プルガル Orlando Silva Pulgar
 ソリエイロ Luis Solleiro
 1959年 コロネル Rafael Coronel
 ウルタド・カステリャーノス
 Jorge Hurtado Castellanos
 フローレス Leopoldo Flores
 グティエレス Gustavo Gutiérrez
 クラムスキー Armando Kramsky
 ニシザワ Luis Nishizawa
 オロスコ・リベラ Mario Orozco Rivera
 1960年 アセベス・ナバロ
 Gilberto Aceves Navarro
 ベテタ・キンタナ
 Ignacio Beteta Quintana
 チャコン・ロドリゲス
 Luis Chacón Rodríguez
 エスカミリア Desiderio Escamilla
 ガルシア・スリタ
 Ramón García Zurita
 イカサ Francisco Icaza
 マルティネス・ガルシア
 Roberto Martínez García
 ネフエロ Ignacio Nefero
 ベガ Jorge de la Vega
 ヤンポルスキー Mariana Yampolsky
 1961年 アキレス・カセレス
 Manuel Aquiles Cáceres
 カスティージョ・アルバレス
 Carlos Castillo Alvarez
 コルソ César Corzo
 フェルグレス Manuel Felguérez
 フローレス Jorge Flores
 ガンディア Vicente Gandía
 リサマ Manuel Lizama

ペーニャ Feliciano Peña
 ビリャグラン Agustín Villagran
 1938年 ベルデシオ Roberto Berdecio
 カストロ・パチエコ
 Fernando Castro Pacheco
 セルビン José María Servín
 ソト Rosendo Soto
 1940年 アウディフレッド Andrés Audifred
 コバルピアス Miguel Covarrubias
 エッペンズ Francisco Eppens
 ゴンサレス・カマレナ
 Jorge Gonzalez Camarena
 ペーニャ Alfonso Peña
 サラサール Faustino Salazar
 1941年 コロナ Jorge Corona
 クエリャル Fuego Cuéllar
 ガルバン Cutberto Galván
 ウエルタ Lidia Huerta
 ウエルタ Lucrecia Huerta
 マルドナード Valeriano Maldonado
 ヌーニェス Enrique Núñez
 プラタ Alejandro Plata
 ロドリゲス・ロサーノ
 Manuel Rodriguez Lozano
 サンティリャン Sixto Santillán
 1942年 ガルシア・フランチ・ブラディ
 Armando García Franchi Vlady
 1943年 アルホナ・アマビリス
 Rolando Arjona Amábilis
 エストラダ Arturo Estrada
 ガルシア・ブストス
 Arturo García Bustos
 カーロ Frida Kahlo
 モンロイ Guillermo Monroy
 ラベル Fanny Rabel
 1944年 アベラ Eduardo Abela
 マルティネス Pedro Martínez
 1945年 ベロフ Angelina Beloff
 ビドル George Biddle
 ガルシア・ロブレド
 Luis García Robledo
 グティエレス José Gutiérrez
 メディナ・グスマン
 Pedro Medina Guzmán
 ラミレス Antonio Ramírez
 1946年 カノ Ramón Cano
 フランコ Antonio Franco
 1947年 レデスマ Gabriel Fernández Ledesma
 モレノ Nicolás Moreno
 ロモ・エストラダ

Ramiro Romo Estrada
 1948年 グッドマン Violet Goodman
 プルネダ Salvador Pruneda
 1949年 エリス Robert Ellis
 ゴメス・デ・アルバ
 Armando Gómez de Alba
 ラソ Rina Lazo
 ムニョース・ロベス
 Rafael Muñoz López
 1950年 アルバレス・アマヤ
 Jesús Alvarez Amaya
 バラハス David Barajas
 ベルキン Arnold Belkin
 ベスト Jorge Best
 カリリョ Carlos Carrillo
 シルバ Federico Silva
 1951年 ガルシア・ナレソ
 José García Narezo
 ロベス・カルモナ
 Armando López Carmona
 ルナ Francisco Luna
 モラーレス・ノリエガ
 José Morales Noriega
 ロドリゲス Jorge Rodríguez
 1952年 バラ・カニンガム
 Oswaldo Barra Cunningham
 カラスコ Atilio Carrasco
 コロネル Pedro Coronel
 コスタ Olga Costa
 クルス Héctor Cruz
 ベガ Alberto de la Vega
 ゴルディーリョ José Gordillo
 グスマン Esther Luz Guzmán
 ホルブロック Hollis Holbrook
 プリエト Miguel Prieto
 オソリオ Fernando Ramírez Osorio
 レイエス・フェレイラ
 Jesús Reyes Ferreira
 ロドリゲス・ラーゴ
 Fernando Rodoriguez Lago
 シェーンベルグ Schoneberg
 1953年 アルマラス Salvador Almaraz
 アヤラ Héctor Ayala
 クルス Ventura Cruz
 フローレス Gabriel Flores
 ゲレロ・ボンセ
 Lorenzo Guerrero Ponce
 エルナンデス・ソチティオツィン
 Desiderio Hernández Xochitiotzin
 イニエグエス Xavier Iñiguez

壁画を制作した作家たちが初登場する年の年次別リスト

*年次は原則として1人の作家が最初に壁画を完成させた年を記載(1921年から1969年まで)。
したがって1920年以前に既に壁画を描いていた作家は含まれない。また共同制作や助手として
他の作家と共に描いたものについても対象外とした。

- | | | | |
|-------|---|-------|--|
| 1921年 | アトゥル(ムリリオ)
Dr. Atl(Gerald Murillo)
レアル Fernando Leal | 1933年 | カステリャノス Julio Castellanos
ドサマンテス Francisco Dosamantes
グリーンウッド Grace Greenwood
グリーンウッド Marion Greenwood
レナウ José Renau
タマヨ Rufino Tamayo |
| 1922年 | アルファロ・シケイロス
David Alfaro Siqueiros
アルバ・デ・ラ・カナル
Ramon Alva de la Canal
シャルロット Jean Charlot
ガルシア・カエロ
Emilio García Cahero
ガルシア・カブラル
Ernesto García Cabral
オロスコ José Clemente Orozco
レブエルタス Fermín Revueltas
リベラ Diego Rivera
ビリャセニョール Eduardo Villaseñor
サラガ Angel Zárraga | 1934年 | アンギアーノ Raúl Anguiano
アルバ・グアダラマ
Ramón Alva Guadarrama
アナヤ Juan Manuel Anaya
バルモリ・ピカソ
Santos Balmori Picazo
カントゥ Federico Cantú
ルンディンス Ryah Lundins
レイエス・ペレス
Roberto Reyes Pérez
スニーガ Francisco Zúñiga |
| 1923年 | クエバ Amado de la Cueva
メリダ Carlos Mérida
オロスコ・ロメロ
Carlos Orozco Romero | 1935年 | ブラ CHO Angel Bracho
カラスコ・エスピノーサ
Gonzalo Carrasco Espinosa
ゴメス・ローサス
José Antonio Gómez Rosas
モントーヤ・デ・ラ・クルス
Francisco Montoya de la Cruz
オゴルマン Cecil Crawford O'Gorman
レンドン Pedro Rendón |
| 1924年 | カラスコ・エスピノーサ
Gonzalo Carrasco Espinosa
ラモス・マルティネス
Alfredo Ramos Martínez | 1936年 | アギーレ Ignacio Aguirre
チャベス・モラード
José Chávez Morado
ガンボア Fernando Gamboa
ゴメス・ハラミério
Ignacio Gómez Jaramillo
グティエレス Antonio Gutiérrez
グティエレス Francisco Gutiérrez
マルティネス Jorge Martínez
メンデス Leopoldo Méndez
パス・ペレス
Gonzalo de la Paz Pérez
プホル Antonio Pujol
ラミレス Everardo Ramírez
レイエス Aurora Reyes
ルイス Antonio Ruiz |
| 1926年 | クエバ・デル・リオ
Roberto Cueva del Río | 1937年 | アレナル Luis Arenal
モラ・ガルベス Rubén Mora Gálvez |
| 1927年 | パチュコ Máximo Pacheco | | |
| 1928年 | サルゴ Andrés Salgó | | |
| 1930年 | オイギンズ Pablo O'Higgins
ソラレス・グティエレス
Eduardo Solares Gutiérrez
ソサモンテス Ramón Sosamontes
サルセ Alfredo Zalce | | |
| 1931年 | ゲレロ・ガルバン
Jesús Guerrero Galván
ミシエル Alfonso Michel
パレス・アリアス José Parrés Arias
オゴルマン Juan O'Gorman
サンチェス・フローレス
Francisco Sánchez Flores | | |
| 1932年 | ガルシア・マロト
Gabriel García Maroto
ツァブ・トレホ Miguel Tzab Trejo | | |

Westheim, Paul, *Tamayo*, Mexico City: Ediciones Artes de México, 1957
Wolfe, Bertram D., *The Fabulous Life of Diego Rivera*, New York: Stein and Day, 1963

(注)

INBA=Instituto Nacional de Bellas Artes

UNAM=Universidad Nacional Autónoma de México

INAH=Instituto Nacional de Antropología e Historia

加藤薫『メキシコ美術紀行』新潮社, 1984

——『ラテンアメリカ美術史』現代企画室, 1987

北川民次『絵を描く子供たち』岩波書店, 1952

——『メキシコの青春』光文社, 1955

——『メキシコの誘惑』新潮社, 1960

国本伊代, 畑恵子, 細野昭雄『概説メキシコ史』有斐閣, 1984

田中文雄『美術概論資料集』国際基督教大学, 1980

利根山光人『メキシコ——火と神話の国』雪華社, 1964

——『メキシコ曼陀羅』小沢書店, 1981

フランコ, ジーン『ラテンアメリカ文化と文学—苦悩する知識人』吉田秀太郎訳,
新世界社, 1974. (原本) Franco, Jean, *The Modern Culture of Latin America*,
Middlesex: Pelican Books, 1970

増田義郎『メキシコ革命』中央公論社, 1968

丸谷吉男『メキシコ』科学新聞社, 1986

メキシコ大学院大学編『メキシコの歴史』村江四郎訳, 新潮社, 1978

美術全集

北川民次『シケイロス』世界の名画 1958

黒沼ユリ子『私とシケイロス』NHK日曜美術館第1集, 学習研究社, 1976

利根山光人『シケイロス』ファブリ世界名画集57, 平凡社, 1970

——『リベラ』ファブリ世界名画集96, 平凡社, 1972

- UNAM, 1959
- , *Carlos Merida*, Colección Arte # 8, Mexico City: UNAM, 1961
- Orozco, José Clemente, *Autobiografía*, Mexico City: Ediciones Occidente, 1945
- , *An Autobiography*, Austin, Texas: University of Texas Press, 1962
- , *Obras de Jose Clemente Orozco en la Colección Carillo Gil*, Mexico City: 1953
- Paz, Octavio, *Tamayo en la Pintura Mexicana*, Colección de Arte # 6, Mexico City: UNAM, 1959
- Prieto, Julio, *José Chávez Morado*, Mexico City: Ediciones Mexicanas, S. A., 1951
- Ramos, Samuel, *Diego Rivera*, Colección Arte # 4, Mexico City: UNAM, 1958
- Reed, Alma M., *The Mexican Muralists*, New York: Crown Publishers, 1960
- , *Orozco*, New York: Oxford University Press, 1956 Mexico City: Fondo de Cultura Económica, 1955
- Rivera, Diego, *Cincuenta Años de su Labor Artística*, Mexico City: INBA, 1951
- , *My Art, My Life: An Autobiography*, New York: Citadel Press, 1960
- Rojas, Pedro, *Historia General del Arte Mexicano, Epoca Colonial*, Mexico City: Editorial Hermes, 1963
- Siqueiros, David Alfaro, *Tres llamamientos de orientación actual a los pintores y escultores de la nueva generación de América*, (オリジナル) "Revista Vida Americana", Barcelona, Spain: 1921 (復刻版) Raquel Tibol, *Siqueiros: Introdutor de realidades*, UNAM, 1961
- , *Manifiesto del Sindicato de Obreros Técnicos, Pintores y Escultores*, (復刻版) Raquel Tibol, *David Alfaro Siqueiros y obra*, Mexico City: Empresas Editoriales, S. A., 1969
- , *La crítica del arte como pretexto literario*, Revista Artes de Mexico # 4: Mexico City, 1948
- , *Cómo se Pinta un Mural*, Mexico City: Ediciones Mexicanas, S. A., 1951
- , *Monografía*, Mexico City: INBA, 1951
- , *Siqueiros*, Mexico City: Ediciones Galería de Misrachi, 1965
- Suárez, Luis, *Confesiones de Diego Rivera*, Mexico City: Ediciones Era, 1962
- Suárez, Orlando S., *David Alfaro Siqueiros, guía para el estudio de su vida y su obra*, Special issue of "Arte Público", Mexico City: 1969
- , *Inventario del Muralismo Mexicano*, Mexico City: UNAM, 1972
- Tejada, Antonio, *Ancient Maya Painting of Bonampak, Mexico*, Washington D. C.: Carnegie Instituto, 1955
- Tibol, Raquel, *Siqueiros, Introdutor de Realidades*, Colección Arte # 8, Mexico City: UNAM, 1961
- , *David Alfaro Siqueiros y su Obra*, Mexico City: Empresas Editoriales, S. A., 1969
- , *Historia General del Arte Mexicano, Epoca Moderna y Contemporánea*, Mexico City-Buenos Aires: Editorial Hermes, S. A., 1963
- Toussaint, Manuel, *Arte Colonial en México*, Mexico City: Instituto de Investigaciones Estéticas, UNAM, 1948 (1st ed.) Austin and London: University of Texas Press, 1967

- Renacimiento, S. A., 1959
- Editorial Hermes, *Arte Mexicano*, 4 vols., Mexico City: 1963
- Editorial Herreno, *40 siglos de Arte Mexicano*, Mexico City: 1975
- Edwards, Emily, *Painted Walls of Mexico from Prehispanic Times until Today*, Austin: University of Texas Press, 1966
- Fernández, Justino, *El Arte Moderno en Mexico*, Mexico City: Editorial Porrúa e Hijos, 1937
- , *Prometeo: Ensayo sobre pintura contemporánea*, Mexico City: Editorial Porrúa, S. A., 1945
- , *Tres Decadas de Pintura Mural en Mexico*, Revista Mexico en el Arte #10/11, Mexico City: INBA, 1950
- , *Arte Moderno y Contemporaneo de Mexico*, Mexico City: Instituto de Investigaciones Estéticas, UNAM, 1952
- , (Ed.), *Textos de Orozco*, Mexico City: Instituto de Investigaciones Estéticas, UNAM, 1955
- , *Orozco, Forma e Idea*, Mexico City: Editorial Porrúa, S. A., 1956
- , *Arte Mexicano, de sus origenes a nuestros dias*, Mexico City: Editorial Porrúa, S. A., 1961 Chicago and London: University of Chicago Press, 1969
- , *Roberto Montenegro*, Mexico City: Colección Arte #10, UNAM, 1962
- , *El Hombre, Estetica del Arte Moderno y Contemporaneo*, Mexico City: Instituto de Investigaciones Estéticas, UNAM, 1962
- , *El Arte del sigloXIX en México*, Mexico City: UNAM, 1983
- Flores-Sanchez, Horacio, (ed.), *José Guadalupe Posada*, Mexico City: INBA, 1963
- Fondo Editorial de la Plástica Mexicana, *Mural Painting of the Mexican Revolution, 1921-1960*, Mexico City: 1960
- Galería del Arte, *Artistas Plasticos Mexico 75*, Mexico City: Ediciones Culturales, 1975
- Garcia Rivas, Heriberto, *Pintores Mexicanos*, Mexico City: Editorial Diana, S. A., 1965
- Goldwater, Robert, *Rufino Tamayo*, New York: Quadrangle Press, 1947
- Gual, Enrique F., *Siqueiros*, Mexico City: Anáhuac, Cía. Editorial S. A., 1967
- Helm, MacKinley, *Man of Fire: Orozco*, Institute of Contemporary Art, Boston and New York: Harper Brothers, 1941
- , *Modern Mexican Painters*, New York and London: Harper Brothers, 1941
- Hopkins, John H., *Orozco: A Catalog of His Graphic Work*, Flagstaff, Arizona: Northland Press, 1967
- Iñiguez, Diego Angulo, *Historia del Arte Hispanoamericano*, Barcelona: Salvat Editores, 1945-56
- Messer, Thomas M., *The Emergent Decade: Latin American Painters and Paintings in the 1960s'*, Ithaca: Cornell University Press, 1966
- México en el Arte, *Twelve Members, 1948-1952*, Mexico City: INBA
- Myers, Bernard S., *Mexican Painting of Our Time*, New York: Oxford University Press, 1956
- Nelken, Margarita, *Carlos Orozco Romero*, Colección Arte #7, Mexico City:

参考文献

ここにあげる参考文献は、以下のような範囲のものである。

- 本書の執筆にあたって参考にした壁画関係の資料（英語、スペイン語、日本語の文献に限る）。
- 英語、スペイン語の文献は、古代・植民地時代の絵画あるいは壁画について述べたものを含む（ただし、一般的な性格のものに限る）。
- 日本語の文献は現代、特に壁画に関するものに限った。
- 雑誌、論文などは、特集でない限り割愛した（ただし、三巨匠のマニフェストや展覧会カタログについては、特に重要なもののみ例外として掲載）。

- Arenal (de Siqueiros), Angélica, *Biografía Humana de José David Alfaro Siqueiros*, Mexico City: INBA, 1947
- , *Vida y Obra de David Alfaro Siqueiros*, Archivo del Fondo 44/45, Mexico City: Fondo de Cultura Economica, 1975
- Arroyo, Antonio Luna, *El Dr. Atl, Sinopsis de su vida y su pintura*, Guadernos Populares de Pintura Mexicana Moderna, Mexico City: Editorial Cultura, 1952
- Bayón, Damian, *Aventura Plastica de Hispanoamerica*, Mexico City: Fondo de Cultura Económica, 1974
- Berdicio, R. and Appelbaum S., (ed.), *Posada's Popular Mexican Prints*, New York: Dover Publications, 1972
- Bernal, Ignacio, *Teotihuacán*, Mexico City: INAH, 1963
- Bibliografía OMEGA, *Enciclopedia del arte en America*, Buenos Aires, 1969
- Cardoza y Aragón, Luis, *Pintura Mexicana Contemporánea*, Mexico City: Umprenta Universitaria, 1953
- , *Orozco*, Mexico City: Instituto de Investigaciones Estéticas, UNAM, 1959
- , *México: Pintura de Hoy*, Mexico City: Fondo de Culturá Económica, 1964
- Carillo A. Rafael, *Mural Painting of Mexico*, (tr.) David Castledine, Mexico City: Panorama Editorial, S. A., 1981
- Castedo, Leopoldo, *A History of Latin American Art and Architecture*, New York and Washington: Frederick A. Praeger, 1969
- Catlin, S. L. and Grieder, T., *Art of Latin America since Independence*, New Haven: Yale University Press, 1966
- Charlot, Jean, *Mexican Mural Renaissance, 1920-1925*, New Haven: Yale University Press, 1963
- Chase, Gilbert, *Contemporary Art in Latin America: Painting, Graphic Arts, Sculpture, Architecture*, New York: Free Press, 1970
- Covarrubias, Miguel, *Indian Art of Mexico and Central America*, New York: Alfred Knopf, 1957
- Crespo de la Serna, Jorge Juan, *Circunstancia y evolución de las artes plásticas en México en el period 1900-1950*, Revista Mexico en el Arte #10/11, Mexico City: INBA, 1950
- De la Torre, Lolo, *Memoria y razón de Diego Rivera*, Mexico City: Editorial

- スペイン生まれで1939年以来メキシコで活躍する画家。現在は東独に在住〈1907-〉
 レブル, サンティアゴ Santiago REBULL 78, 132
 1860年代から90年代まで、主にチャプルテペック城の整備のために働いた新古典主義の建築家、
 画家
 レルマ川 Rio Lerma 168
 メキシコ市の水源
 レンブラント, ファン・レイン Harmensz van Rijn REMBRANDT 178
 オランダの画家、版画家〈1606-1669〉
 ロシア革命 64, 138, 140
 ロセル, ギエルモ Guillermo ROSELL 192, 205
 メキシコの建築家
 ロックフェラー・センター 159, 160
 ロド, ホセ・エンリケ José Enrique RODÓ 65
 ウルグアイの哲学者、詩人〈1871-1917〉
 ロドリゲス・ルナ, アントニオ Antonio RODRÍGUEZ LUNA 187
 メキシコの画家
 ロートレック Henri de Toulouse-LAUTREC 39
 フランスの画家、版画家〈1864-1901〉
 ロペス・ポルティエーヨ, ホセ José LÓPEZ PORTILLO 238
 メキシコ大統領〈在位1976-82〉
 ロペス・マテオス, アドルフォ Adolfo LÓPEZ MATEOS 199
 メキシコ大統領〈1910-69〉
 ロマネスク 70
 ロマン主義 29~32, 34, 40, 46, 48, 50, 54, 86, 89
 ローレンス, D. H. David Herbert LAWRENCE 173
 イギリスの小説家〈1885-1930〉
 ロレンツェッティ, アンブロジーオ Ambrogio LORENZETTI 70
 イタリアの画家〈?-1348?〉

ワ行

- ワイヤ・ロープ wire-rope 85, 91, 168

すようになる

ランデシオ, エウヘニオ Eugenio LANDESIO 48

イタリア出身の風景画家, アカデミア教師 <1810-1879>

リオス, アンドレス Andrés RÍOS 132

リステル LISTER 187

リード, アルマ Alma REED 108, 185

ニューヨーク在の詩人, 文学者, 美術活動プロデューサー

リトグラフ 31, 39, 40, 159, 226

リナッティ, クラウディオ Claudio LINATTI 31

メキシコで活躍したコストンブリスタ画家

リバス・メルカード, アントニオ Antonio RIVAS MERCADO 176

メキシコの建築家。革命期のアカデミアの校長

リベラ, カルロス Carlos RIVERA 132

リベラ, ディエゴ Diego RIVERA 94, 114, 131~174, 178, 180, 182, 186, 190, 205, 206, 210~213, 215, 216, 218, 223, 225, 229, 231, 235, 243, 245

壁画三巨匠の一人 <1886-1957>

リベラ, ディエゴ (リベラの父) 131, 132

リベラ, ディエゴ (リベラの子) 138

リベラ, ディエゴ・アナスタシオ Diego Anastasio RIVERA 131

リベラ・ホール Rivera Hall 159

リンカーン, アブラハム Abraham LINCOLN 188

アメリカの大統領 <1809-1865>

ルイス, ホセ・L José L. RUIZ 190

メキシコの彫刻家

ルエダ, ヒメネス Jiménez RUEDA 190

メキシコの化学者

ルエラス, フリオ Julio RUELAS 50

メキシコの画家, グラフィック・アーティスト。象徴主義的作風 <1870-1907>

ルネサンス 26, 27, 70, 72, 78, 87, 96, 101, 102, 104, 138

ルノアール, オーギュスト Pierre-Auguste RENOIR 134, 136

フランスの画家 <1841-1919>

ルビオ, カルメン Carmen RUBIO 12

ディアス夫人

ルーブル美術館 110

レアチ, サンティアゴ Santiago REACHI 170

メキシコの実業家

レアル, フェルナンド Fernando LEAL 182, 213

コヨアカン野外美術学校を主催

レイ, マン Man RAY 178

アメリカ出身の写真家, 画家, 映画作家 <1890-1976>

レイエス, アルフォンソ Alfonso REYES 65

メキシコの学者, 文学者 <1889-1959>

レオナルド・ダ・ビンチ LEONARDO DA VINCI 72, 110, 138

イタリアの画家, 彫刻家, 建築家, 科学者 <1452-1519>

レクトリア Rectoria 192

メキシコ国立自治大学の学務棟

レタブロ Retablo 28, 182

通常は祭壇横立画と訳されるが, スペイン及びラテンアメリカでは祭壇後方に設置される絵画と彫刻が総合化された巨大装飾物を指す

レディース・ガーメント・ワーカーズ・ユニオン 160

レナウ, ホセ José RENAULT 187

イダルゴ州

メリダ, カルロス Carlos MÉRIDA 215~217

グアテマラ生まれの画家。初期よりメキシコ壁画運動に参加し、大きな影響を与える〈1891-〉

メリダ市 Merida 40

モザイク mosaic 80, 85, 91, 162, 168, 170~173, 192~195, 216, 217, 220, 222, 225

モダニズム 43, 50~52, 54, 61, 87, 105, 134

モディリアニ, アメデオ Amedeo MODIGLIANI 134, 215

イタリア生まれの画家, 彫刻家〈1884-1920〉

モラーレス, ボアネルヘス Boanerges MORALES 96

サン・カルロス美術学校の学生ストライキと組合の指導者

モルタル mortar 83, 104

土, 石灰, セメントなど, 壁体外装に使う建築材料

モーレイ, シルバヌス・G Shylvanus G. MORLEY 213

アメリカ人の考古学者。チチェン・イツァの発掘を手がける

モロス・イ・パボン, ホセ・マリア José María MORELOS Y PAVON 150, 154

メスティーソの司祭でメキシコ独立解放運動の指導者〈1765-1815〉

モロス州 Morelos 15, 19, 76, 148, 150

モロー, デウィット Dwight MORROW 150

アメリカ合衆国の駐メキシコ大使

モンテネグロ, ロベルト Roberto MONTENEGRO 142, 215, 216

メキシコの画家〈1885-1968〉

文部省 Secretaría de Educación Publica 142, 143, 223

ヤ行

野外美術学校 Escuela al Aire Libre 100, 176, 213, 225, 226, 244

ヤキ族 Yaqui 19

メキシコ北東部に住むインディオ

ヤンユイトラン市 Yanhuítlan 76

オアハカ州

ユカタン半島 Yucatán 40, 72, 74

ラ行

ラサロ, エンリケ Enrique LÁZARO 185

アルゼンチンの画家

ラス・カサス, バルトロメ・デ Bartolomé de LAS CASAS 154

スペインのドミニコ会派の宣教師, 司祭〈1474-1566〉

ラテンアメリカ労働組合連合 Confederación Sindical Latinoamericana 181

ラファエル前派 50

ラファエロ RAFFAELLO Santi 72, 96, 110, 175

イタリアの画家, 建築家〈1483-1520〉

ラベル, ファニー Fanny RABEL 187, 229, 230

ポーランド生まれでフランスで教育を受け, 1937年以来メキシコで活躍する画家〈1922-〉

ラマ公園 Parque de la Lama 200, 203~206

ラ・マセタ La Mazeta 181

ラミレス, イグナシオ Ignacio RAMÍREZ 166

19世紀後半に活躍したメキシコの文化人〈1818-1879〉

ラモス・マルティネス, アルフレッド Alfredo RAMOS MARTÍNEZ 100, 176, 244

野外美術学校の提唱者, 組織者〈1875-1946〉

ランチェロ Ranchero 175

元来は, アシエンダの一面を年季あけの従業員に分け与えた牧場。転じて家畜専用の牧場を指

シリアにあるシュメール以来の古代遺跡。テル・ハリリ王宮がある
 マリネッティ, フィリッポ Filippo Tommaso MARINETTI 178
 エジプト生まれのイタリアの詩人, 小説家, 劇作家 <1876-1944>
 マリン, グアダルーペ Guadalupe MARÍN 142, 143, 148
 マルティ, ホセ José MARTI 188
 ラテンアメリカ独立運動の英雄
 ミケラハウレグイ, ラモン Ramon MIQUELAJÁUREGUI 205
 メキシコの建築家
 ミケランジェロ MICHELANGELO Buonarroti 72, 96, 114, 138
 イタリアの画家, 彫刻家, 建築家 <1475-1564>
 ミゲル・アレマン養護院 Multifamiliar Presidente Aleman 130
 メキシコ市
 ミスラッチ画廊 Galería Misrachi 200, 207
 メキシコ市にある画廊
 ミチョアカン州 Michoacan 56, 118
 『みづゑ』 231
 ミトラ Mítla 72
 オアハカ州, オアハカ市近郊にあるサポテカ及びミシュテカ人の神殿遺跡
 ミニマル・アート Minimal Art 236
 1960年代後半, アメリカを中心に興った美術表現
 未来派 178, 242
 ムデハル Mudéjar 76, 78, 216
 イスラムの美術意匠をもつ西洋建築, 美術
 ムリリオ, ヘラルド Geraldo MURILLO 54, 56~58, 85, 96, 99, 134, 142, 177, 184
 20世紀のメキシコ近代絵画, 壁画運動の先駆者 <1875-1964>
 メキシコ・オリンピック 213, 234, 238
 メキシコ革命 12, 18~20, 22, 29, 41, 52, 58, 60, 64, 66, 68, 69, 78, 85, 87, 105, 114, 183, 186, 199, 212, 213, 216,
 233, 235, 238
 メキシコ革命党 186, 238
 PRM
 メキシコ溪谷 48, 54, 56
 メキシコ共産党 142, 143, 180, 181, 186, 218
 メキシコ国立近代美術館 182, 213, 234
 メキシコ国立工科大学 Instituto Politécnico Nacional 189, 190, 192, 230
 ポリテクニコ
 メキシコ国立自治大学 Universidad Nacional Autonoma de México 193~195, 207, 219, 220, 223, 228
 メキシコ国立人類学歴史博物館 228, 233
 メキシコ市国際空港 233
 メキシコ州 76
 メキシコ中央高原 74
 メキシコ電気労連 Sindicato Mexicano de Electricistas 187
 メキシコ版画団体展 Exposición colectiva de grabados me 182
 メキシコ・ビエンナーレ Bienal Interamericana de Pinturay Grabado de Mexico 130, 198
 メキシコ盆地 56
 メキシコ民芸博物館 215
 メシアック, アドルフォ Adolfo MEXIAC 228, 229
 メキシコの画家, 版画家, イラストレーター, 壁画作家 <1927- >
 メスティーゾ Mestizo 12~14, 16, 22, 40, 47, 52, 58, 61, 68, 87, 89, 90, 131, 138
 メソナイト mesonite 91, 188
 硬質ゴムの一種
 メツティラン市 Metztlán 76

ポソ, ホセ・デル José del PÓZO 96
 サン・カルロス美術学校の学生ストライキと組合の指導者
 ボタナ, ノタリオ Notalio BOTANA 185
 『クリティカ』誌の社主
 ポップ・アート Pop Art 236
 風俗やサブカルチャーをとり入れた美術。1960年代のニューヨークが中心
 ボデゴン Bodegón 38
 ラテンアメリカでは、特に素朴画風に描かれた静物画を指し、食堂などを飾った
 ホテル・カシノ・デ・ラ・セルバ Hotel Casino de la Selva 200
 ホテル・セビリャ=ビルトモア Hotel Sevilla-Biltmore 188
 ハバナ市
 ホテル・デ・メヒコ Hotel de México 230
 ホテル・デル・プラド Hotel del Prado 164, 166
 ホテル・レフォルマ Hotel Reforma 160, 164
 ボナンパック Bonampak 72
 マヤの遺跡。壁画で有名
 ポモナ・カレッジ Pomona College 108, 223
 ボラニョス, マテオ Mateo BOLAÑOS 176
 メキシコの画家
 ポリテクニコ
 →メキシコ国立工科大学
 ポリバル講堂 Anfiteatro Bolívar 142, 213, 215
 ポリフォルム・カルトゥラル・デ・シケイロス Polyforum Cultural de Siqueiros 203~205, 207
 ポリプロピレン polypropylen 91
 プロピレンから作られるプラスチック樹脂
 ポルトランド・セメント portland cement 84
 19世紀に完成した人工セメント材
 ホルヘ・ネグレーテ劇場 Teatro Jorge Negrete 198, 207
 ポロック, ポール・ジャクソン Paul Jackson POLLOCK 186
 アメリカのアクション・ペインティングの代表作家 (1912-1956)
 ペンペイ 70

マ行

マヴォ・グループ 242
 村山知義を中心として構成主義を主張した美術グループ
 マクシミリアン皇帝 Maximilian 128, 154
 メキシコ皇帝 (在位1864-1867)
 マサッチオ Masaccio 70
 イタリアの画家 (1401-1428頃)
 『マチェテ』 El Machete 105, 181
 マティス, アンリ Henri MATISSE 134
 フランスの画家、版画家、彫刻家 (1869-1954)
 マデロ, フランシスコ Francisco Indalecio MADERO 19, 20, 66, 99, 177
 メキシコの政治家 (1873-1913)
 マニエリスム 72
 マニラ, マニユエル Manuel MANÍLLA 41, 95
 メキシコのグラフィック・アーティスト。ボサダと同じ工房で働く (1830-1890?)
 マーフィ, ダドリー Dudley MURPHY 183
 アメリカの映画監督 (1897-)
 マヤ Maya 72, 74, 213
 マリ Mari 70

通常、貧農と訳される。一般にアシエンダ労働者を指す
 ベーカー図書館
 →ダートマス・カレッジ
 壁画の三巨匠 60, 94, 211, 212, 218, 219, 233
 メキシコ壁画運動を支えたオロスコ, リベラ, シケイロスの3人を指す
 ヘスース・イバラ, ホセ・デ José de JESÚS IBARRA 96
 サン・カルロス美術学校の学生ストライキと組合の指導者
 ヘスース・エレラ, ホセ・デ José de JESÚS HERRERA 176
 メキシコのジャーナリスト, 評論家
 ヘスース病院付属教会堂 128
 ペニャフィエル PEÑAFIEL 72
 1890年テオティワカンの発掘報告書を提出
 ベネツィア・ビエンナーレ Venezia Biennale 190
 ヘフェ・ポリティコ Jefe Político 15
 地方行政担当責任者
 ヘミングウェイ, アーネスト Ernest HEMINGWAY 187
 アメリカの小説家 <1899-1961>
 ベラクルス市 Veracruz 22, 99, 106, 133, 177, 228
 ベラクルス州 Veracruz 133, 200
 ベラクルス州立大学 200, 228
 ベラスコ, ホセ・マリア José María VELASCO 48, 52, 132
 メキシコ出身の風景画家, アカデミア教師 <1840-1912>
 ベルキン, アーノルド Arnold BELKIN 230
 カナダ生まれでメキシコで活躍する画家, 壁画作家 <1932- >
 ベルデシオ, ロベルト Roberto BERDECIO 186, 187
 ボリビア, スクレ市出身の画家 <1910- >
 ベルトラン, アルベルト Alverto BELTRAN 227~229
 メキシコの画家, 版画家, 壁画作家 <1923- >
 ベルニ, アントニオ Antonio BERNI 185
 アルゼンチンの画家 <1905- >
 ペレス, バルボン Barbón PÉREZ 176
 メキシコの画家
 ペレス, ミゲル・アンヘル Miguel Angel PÉREZ 96, 176
 サン・カルロス美術学校の学生ストライキと組合の指導者
 ペレス・ヒメネス, マルコス Marcos PÉREZ JIMENEZ 199
 ベネズエラ大統領
 ベレーム=ジュネ画廊 Berheim-Jeune de Paris 106
 パリにある画廊
 ベロフ, アンヘリーナ Angelina BELOFF 136
 ロシア出身の女性画家
 ベント工科学学校 Escuela Politécnica de Vento 199
 奉献画 Ex-vóte 38
 祈願をかけたたり信仰の証として一般市民が教会に奉納した絵を指す
 法隆寺 70
 ボキーリャ湖 La Boquilla 174
 チワワ州にある湖
 ポサダ posada 170
 メキシコの子供の行事
 ポサダ, ホセ・ガダルーペ José Guadalupe POSADA 15, 19, 38, 41~43, 95, 99, 132, 166, 223
 メキシコ市で活躍した版画家。カラベラ(骸骨)の主題で有名 <1852-1913>
 『ボザール(エコール・デ)』 Ecole de Beaux-art 231

- ファール, エリー Elie FAURE 139
 フランスの美術評論家
 ファレス, ベニート・パブロ Benito Pablo JUÁREZ 128, 130, 154
 独立後の共和国メキシコの近代化に貢献した政治家, 大統領 <1806-1872>
 ブイグ・イ・カウサランク, ホセ・マニュエル José Manuel PUIG Y CAUSARANC 181
 メキシコの文部大臣
 プエブラ市 Puebla 33, 78
 サント・ドミンゴ教会堂付属ロサリオ礼拝堂がある
 プエブラ州 Puebla 74, 76
 フェリペ5世 Felipe V 26
 スペイン国王 <在位1700-1746>
 フェルナンデス, ミゲル・アンヘル Miguel Angel FERNÁNDEZ 96, 176
 サン・カルロス美術学校の学生ストライキと組合の指導者。後に考古学者となる
 フェルナンデス・ウルビナ, ホセ・マリア José María FERNÁNDEZ URBINA 176
 メキシコのアカデミアで教えた画家
 フェルナンド6世 Fernando VI 26
 スペイン国王 <在位1746-1759>
 フェルメ・ラ・ヌー Fermé la Nuit de Paris 108
 パリにある画廊
 フォトモンタージュ 186
 合成写真技法
 フォービズム 243
 藤田嗣治 244
 ブストス, エルメネヒルド Ermenegildo BUSTOS 36
 メキシコの画家。素朴画を描く
 プホル, アントニオ Antonio PÚJOL 187
 メキシコ生まれの画家。農民の出身 <1913- >
 フェウザン会 242
 後期印象派やフォビズムを提唱した大正初期の美術家団体
 ブラザ・アート・センター 183, 226
 プラスチック 236
 ブラック, ジョルジュ Georges BRAQUE 134, 136
 フランスの画家 <1882-1963>
 ブラディ VLADY 230
 メキシコの壁画作家 <1920- >
 フランチェスカ, ピエロ・デラ Piero della FRANCESCA 70
 イタリアの画家 <1420頃-1492>
 プリエト, ミゲル Miguel PRIETO 187
 スペイン出身で1937年以來メキシコで活躍した画家 <1907-1956>
 プリミティブイズム Primitivism 33
 西欧美術では, 1. ルネサンス期以前の美術, 2. いわゆる未開と呼ばれる地域の民俗美術,
 3. アカデミックな規範によらない近代以降の具象絵画の一派のいずれかを指し, このうち3
 の範ちゅうに入るものを日本では特に素朴画と称す
 ブルトン, アンドレ André BRETON 178
 フランスの詩人, 思想家 <1896-1966>
 フレスコ 47, 70, 72, 74, 78, 80, 83~85, 91, 101~106, 108, 110, 112, 114, 116~119, 122, 124, 127, 128, 130,
 139, 143, 144, 146, 148, 150, 154, 158~160, 162, 164, 166, 168, 172, 173, 180, 181, 183~185, 213,
 218, 220
 壁画の伝統的技法のひとつ
 ブロンズ 236
 ペオン Peon 15, 17, 36

ハリスコ州労働者同盟 Confederacion Obreros de Jalisco 181
 張り付け画 80
 パリ・ビエンナーレ 228
 パリで2年毎に催される現代美術展
 バリャダレス, マルガリタ Margarita VALLADARES 105
 ホセ・クレメンテ・オロスコの妻
 バルサ, セザール César BALSA 128
 メキシコの実業家
 パルマ市 Palma 215
 マヨルカ島
 パルラ, フェリックス Félix PARRA 132
 メキシコのアカデミアで教えた新古典主義の画家
 バロック 28, 30, 72, 76, 118
 『バングアルディア・ムンディアル』 La Vanguardia Mundial 99, 177
 『パンチート』 Panchito 99
 バン・ドンゲン, キース Kees VAN DONGEN 215
 オランダ生まれのフランスの画家 <1877-1968>
 ハンビッジ, ジェイ・デ Jay de HAMBIDGE 110
 アメリカの美学者, 評論家
 ピエドラ・ボラ Piedra Bola 181
 メキシコの鉱山
 ピカソ, パブロ Pablo PICASSO 110, 134, 136, 138, 139, 215
 スペインの画家 <1881-1973>
 ピカビア, フランシス Francis PICABIA 178
 フランスの画家 <1879-1953>
 ヒクイルパン市 Jiquilpan 118
 ミチョアカン州
 ビクトリア・アンド・アルバート美術館 110
 イギリス
 『美術手帖』 231
 ヒスパニック Hispanic 240
 『ビダ・アメリカーナ』 Vida Americana 180
 ビニャータ Piñata 170
 メキシコの民芸はりぼて人形。中に菓子を詰める
 ビブロス Biblos 99
 メキシコ市にある有名な書店
 ヒメノ・イ・プラネス, ラファエル Rafael JIMENO Y PLANES 78
 メキシコのアカデミアで教えた新古典主義の画家 <1759-1825>
 表現主義 140
 ビリャ, フランシスコ (パンチョ) Francisco (Pancho) VILLA 19, 20, 22, 60, 66, 99, 174, 177
 メキシコ革命の英雄 <1878-1923>
 ピレット・メソッド Pillet Method 176
 素描教育の一つ。木炭, コンテ等によるデッサンを中心とした新古典主義教育
 ピロキシリン pyroxylin 91, 178, 185-190, 192, 194
 ニトロセルロースを含むラッカー。樹液を添加して使う
 ファブリカス・アウトメックス Fábricas Automex 192
 国营織物工場
 ファブレス, アントニオ Antonio FABRÉS 132
 アカデミアで教えたイタリア出身の新古典主義の画家
 ファボール・デル・モンテ Favor del Monte 181
 メキシコの鉱山

ニシザワ, ルイス Luis NISHIZAWA 230

日系メキシコ人画家〈1920-〉

日本国際美術展 244

東京ビエンナーレとも呼ばれる。1952年創設の展覧会

日本主義 243

ニュー・スクール・フォア・ソシアル・リサーチ 110

『ニュー・マスイズ』 New Masses 186

ニューヨーク市近代美術館 118, 159

ニューワークス・スクール

→インディペンデント・レーバー・インスティテュート

ヌエバ・エスパーニャ Nueva España 241

現在のメキシコを中心とした植民地時代の副王領

ネオ・インディヘニズモ Neo-indigenismo 238, 239

ネベル, カルロス Carlos NEBEL 18, 34

メキシコで活躍したコロンブリスタ画家

野田英夫 243

洋画家。カリフォルニア生まれの熊本育ちで1926年渡米。壁画を制作する〈1908-1939〉

ノノアルコトラテルコ高層集合住宅 233

メキシコ市にある初期の高層住宅群

ハ行

ハイパーリアリズム Hyper-realism 187

スーパーリアリズムともいう。1960年代後半に登場した、写真などを利用したりアリズム絵画様式

バスコンセロス, ホセ José VASCONCELOS 65~67, 101, 106, 142, 180, 181, 218

メキシコの哲学者、文学者、政治家〈1882-1959〉

支倉常長 241

伊達政宗の家臣。1613年遣欧使節としてメキシコからスペイン、ローマに渡り、1620年に帰国〈1571-1622〉

パチェコ, マシモ Maximo PACHECO 225

メキシコの画家、壁画家、イラストレーター〈1905-〉

バティスタ・イ・サンディバル, フルヘンシオ Fulgencio BATISTA Y ZALDÍVAR 198

キューバの軍人出身の大統領〈1901-1973〉

パディリャ, アントニオ Antonio PADILLA 78

メキシコのアカデミアで教えた新古典主義の画家〈メキシコでの活動期1830-1840年代〉

パニ, アルベルト・J Alberto J. PANI 140, 160, 162

駐仏大使をつとめたメキシコの美術パトロン

バネガス・アロヨ, アントニオ (父) Antonio VANEGAS ARROYO 41, 95, 132, 223

メキシコ市の大衆向け出版物の印刷出版を手掛けた〈活動期1880-1900年代〉

バネガス・アロヨ, アントニオ (子) Antonio VANEGAS ARROYO 223

アントニオ・バネガス・アロヨ (父) の長男

パラッシオ・デ・ラス・バカス Palacio de las Vacas 216

グアダラハラ市。現コレヒオ・デ・バスコ・デ・キログ

ハラパ市 Jalapa 200, 228

ベラクルス州

バリエントス, マリア・デル・ピラール Maria del Pilar VALIENTOS 131

ディエゴ・リベラの母

パリクティン Parictin 56

ハリスコ州 Jalisco 112, 114, 116, 117, 119, 122, 124, 127, 128, 215, 225

ハリスコ州議会議事堂 Poder legislativo del Estado de Jalisco 130

グアダラハラ市

デルフィック・スタジオ 108, 186
 ニューヨークにある画廊
 テンペラ tempera 80, 91, 172, 220
 卵白、膠、アラビアゴム等を固着材とした絵具。速乾性と耐久性に富む
 東京国立博物館 244
 ドゥランゴ州 Durango 223
 徳川家康 241
 〈1542-1616〉
 ドクトル・アトゥル Dr. ATL
 →ムリリョ
 独立記念日 12, 14
 9月16日
 独立美術協会 242
 1930年創立のフォビズムを主張した洋画家団体
 トスカノ、サルバドル Salvador TOSCANO 72
 メキシコの考古学者
 トトナカ Totonaca 74
 メキシコ沿岸、現在のペラグルス州に興った古代文化
 トナラ市 Tonala 225
 ハリスコ州。陶芸で有名
 トナンツィントラ村 Tonantzintla 78
 プエブラ州。サンタ・マリア教会堂がある
 利根山光人 245
 洋画家。メキシコの色や原始的エネルギーに魅かれる 〈1921- 〉
 ドーミエ、オノレ Honoré DAUMIER 42
 フランスの画家、版画家、彫刻家 〈1808-1879〉
 トライーニ、フランチェスコ Francesco TRAINI 70
 イタリアの画家 〈活動期1321-1364〉
 トラテロルコ Tlatelolco 189
 トラヤコチャウアカン市 Tlayacochahuacan 76, 80
 オアハカ州。サント・ドミンゴ教会堂がある
 トラロカン Tlalócan 72, 74
 トラロック Tlaloc 56, 168
 水と農耕の神。テオティワカン文化の最高神
 トルサ、マニエール Manuel TOLSA 114
 メキシコの新古典主義の建築家、彫刻家 〈1757-1816〉
 トーレ、フランシスコ・デ・ラ Francisco de la TORRE 96
 サン・カルロス美術学校の学生ストライキと組合の指導者
 トロツキー、レフ・ダビドビッチ Lev Davidovich TROTSKII 160, 162, 187
 ロシア革命の指導者 〈1879-1940〉
 ドローレス Dolores 12
 グアナファト州
 敦煌 70

ナ行

ナシオナル・コンセルバトリオ Nacional Conservatório 218
 メキシコ市セントロ地区にあった音楽堂。今は政府庁舎として使われている
 ナショナル・ギャラリー 110
 ロンドンにある画廊
 二科会 242
 1914年以来今日まで続く美術団体

チチャロ, エドゥアルド Eduardo CHICHARRO 134
 スペインの画家
 チャウイナード・スクール・オブ・アーツ Chouinard School of Arts 183
 チャピング Chapingo 143
 チャピング国立農業学校 143, 144, 146, 166, 223
 チャプルテベック公園 128, 168, 194
 メキシコ市北西部にある公園で美術館, 劇場, 動物園, 池などがある
 チャプルテベック城 Castillode Chapultepec 20, 128, 196, 198~200
 チャベス, カルロス Carlos CHÁVEZ 159
 メキシコの作曲家 (1899-1978)
 チャベス・モラード, ホセ José CHAVEZ MORADO 223, 225, 226
 メキシコの壁画作家 (1909-)
 抽象主義 64, 140
 抽象表現主義 236
 一般に1950年代のアメリカ抽象主義絵画を指す
 チュルブスコ美術学校 Churubusuco 244
 チョルーラ市 Cholula 74
 プエブラ州
 チワワ市 Chihuahua 174
 チワワ州
 チワワ州 Chihuahua 19, 174
 ツァポトラン・トラヨラン Zapotlan Tlayolan
 →シウダッド・グスマン
 ツアラ, トリスタン Tristan TZARA 178
 ルーマニア生まれのフランスの詩人 (1896-1963)
 ディアス, ポルフィリオ Porfirio DÍAZ 12~14, 16, 18~20, 22, 23, 50, 51, 54, 56, 58, 65, 68, 94, 96, 99,
 101, 106, 134, 154, 175, 219, 234, 235
 メキシコの政治家 (1830-1915)
 ディエグエス, マニユエル・M Manuel M. DIÉGUEZ 177
 メキシコの軍人, 州知事
 ティツィアーノ TIZIANO Vecellio 110
 イタリアの画家 (1490頃-1576)
 ティントレット TINTORETTO 110
 イタリアの画家 (1518-1594)
 テオティワカン Teotihuacan 56, 70, 72, 74
 3世紀より7世紀頃までメキシコ中央高原で栄えた文化。マヤにも影響を与える
 テカリ市 Tecali 76
 プエブラ州。サン・フランシスコ教会堂がある
 デーサ, テオドロ Teodoro DEHESA 133
 ベラクルス州知事
 デトロイト・インスティテュート・オブ・アーツ 159
 テノチティラン Tenochtitlan 74
 アステカ帝国の首都。現在のメキシコ市
 テパンチトラ Tepanchitla 72, 74
 テオティワカン遺跡にある建造物
 デュシャン, マルセル Marcel DUCHAMP 178
 フランスの美術家 (1887-1968)
 デュフィ, ラウル Raoul DUFY 134
 フランスの画家 (1877-1953)
 テル・ハリリ Tell Hariri
 →マリ

1930年協会 242

1926年創立。フォービズムの傾向を示した洋画家美術団体。以後独立美術協会に発展的解消
全国大学協会 128

セントロ・ボエミオ Centro Bohemio 177, 181, 216

グルーボ・ボエミオとも呼ぶ。1910-1920年代に形成されたグアダハラ市の美術家グループ
総合主義 136

草土社 242

1915年創設の洋画団体。北欧的な細密描写の写実主義の傾向を示した

ソト, ヘスース・M Jesus M. SOTO 177

メキシコの画家

ソナ・ロサ画廊 Galería Zona Rosa 207

メキシコ市にある画廊

ソビエト芸術アカデミー 194, 207

素朴画 33, 36, 38, 43, 54, 89, 105

ソラーレス・グティエレス, エドゥアルド Eduardo SOLARES GUTIÉRREZ 175

メキシコの画家

ソルグデラ Soldadera 16, 61, 99, 174

兵士の身の回りの世話をする従軍女性

ソロリャ SOROLLA 134

スペインの画家

タ行

大学都市 Ciudad Universitaria 168, 233

タイル 91, 192, 225

タイルの家 106

サンボルンス百貨店

ダウンタウン・ギャラリー Downtown Gallery 110

ニューヨークにある画廊

タエール・デ・グラフィカ・ポピュラーल Taller de Gráfica Popular 225, 227

大衆向け印刷物, 版画の制作, 及び教育訓練を行なった政府直営の施設

タスコ市 Taxco 182, 244

ゲレロ州

タスコ市美術学校 226, 244

グダ 139, 140, 178

1916年チューリヒで興った美術運動

伊達政宗 241

ダートマス・カレッジ 110

タブラダ, ホセ・ファン José Juan TABLADA 215

メキシコの詩人, 評論家

タブロー画 69, 70, 72, 78, 87-89, 91, 138, 139, 164, 182, 220, 236

タマヨ, ルフィーノ Rufino TAMAYO 190, 218, 219

メキシコの画家。壁画運動以降のメキシコ現代美術最大の指導者 <1899- >

タムイン Tamuin 74

サン・ルイ・ポトシ州。ウアステカ人の中心遺跡

チアパス州 Chiapas 72

チェンニーニ, チェンニーノ Cennino d'Andrea CENNINI 101

イタリアの画家 <1360頃-1440頃>

チカノ Chicano 239, 240

メキシコ系アメリカ人の総称

チチェン・イツァ Chichen-Itza 74, 213

ユカタン半島にあるマヤの遺跡

ジョルジュ・プティ Georges Petit 112
 パリの画廊
 シリコン 91, 128, 130, 185
 撥水性のある反有機性ポリマー。熱に安定
 シルクロ・アルティスティコ Circlo artistico 96
 ヘラルド・ムリリオの指導で組織された芸術家グループ
 新印象主義 50
 辛亥革命 64
 新古典主義 27～29, 31～34, 46～48, 78, 84, 87, 114, 176
 シンコ・ミナス Cinco Minas 181
 メキシコの鉱山
 シンテックス Syntex 230
 スアレス, オルランド・S Orlando S. SUÁREZ 231
 スアレス, ヘラルド Gerardo SUÁREZ 78
 グアダハラハ市で活躍した新古典主義の画家〈メキシコでの活動期1880年代〉
 スアレス, マヌエル Manuel SUÁREZ 200, 205
 メキシコの実業家
 スターン, ジーグムンド Seigmund STERN 159
 アメリカの実業家
 スタンダール・アンバセイダー Standhal Ambassador 183
 ロス・アンジェルス画廊
 ステファンス John Lloyd STEPHENS 72
 アメリカ人外交官, 法律家, 考古学者〈メキシコでの活動期1839-1842〉
 ステンレス・スチール 236
 ストコフスキー, レオポルド Leopold STOKOWSKI 159
 アメリカの指揮者〈1882-1977〉
 スノ, ホセ・ガダルーペ José Guadalupe ZUNO 177
 グアダハラハ市で活躍した画家。後に政治家に転身
 スピリンベルグ, リノ・エネアス Lino Eneas SPILIMBERGO 185
 アルゼンチンの画家
 スプレーガン 85, 91, 183～185, 187, 227
 スペイン語化運動 227
 スマラガ, フアン・デ Juan de ZUMÁRRAGA 154
 メキシコ初代大司教。人文主義者〈?-1548〉
 スロアガ, イグナシオ Ignacio ZULOAGA 134
 スペインの画家
 スローン, ジョン John SLOAN 244
 アメリカの画家〈1871-1951〉
 制度的革命党 238, 245
 PRI
 セクレタリア・デ・コミュニカシオス 225
 セザンヌ, ポール Paul CÉZANNE 134, 136
 フランスの画家〈1839-1906〉
 『CETEME』 228
 セメント 85, 91, 130, 183, 185, 187, 190, 193～195, 200, 203～206, 226, 228
 セルジ, ビクトール Victor SERGE 230
 ソビエトの作家, プラディの父
 セレル SELER 72
 1888年オアハカ州ミトラ遺跡の報告をまとめる
 セロテックス 178, 189, 190, 194, 196～198
 セルロイドタイプのシート

サンボルンス Sanborns 106
 ・ 百貨店
 サン・ミゲル・デ・アリエンデ San Miguel de Allende 131, 190
 グアナファト州
 シウダッド・グスマン Ciudad Gúzman 95
 ハリスコ州
 シェイプト・キャンバス shaped canvas 184
 変形キャンバスのこと
 シエンティフィコ Científico 12, 13, 23, 118, 127
 実証主義に基づくメキシコの近代化を唱えたグループ
 ジオット GIOTTO di Bondone 70, 110
 イタリアの画家、建築家〈1267頃-1337〉
 シケイロス, ダビッド・アルファロ David ALFARO SIQUEIROS 94, 101, 105, 139, 140, 142, 143, 162,
 174~208, 210~212, 216, 218, 226, 235, 245
 壁画三巨匠の一人〈1898-1974〉
 シケイロス実験工房 186, 226, 230
 美術の最新技術研究所
 シケイロス制作学校 Escuela Taller de Siqueiros 205
 クエルナバカ市に設立された工房
 シケイロス美術館 207
 シケリアノス夫人 Sikelianos 108
 ニューヨークの芸術家パトロン
 システィーナ礼拝堂 Cappella Sistina 72, 114
 ローマのバチカン宮殿内にある礼拝堂。壁画で有名
 湿式フレスコ fresco buono 80, 83, 102, 104
 地塗面が湿った状態で上絵を描く技法
 実証主義 13, 23, 54, 65
 シノピア sinopia 83
 壁画制作工程で、壁面に転写された下絵のこと
 死の舞踏 danse macabre 42
 西欧中世から流行した「死」を主題とする図像表現。骸骨で死が象徴される
 清水登之 243
 洋画家。1907年渡米、スローン等と親交を結びフランスにも渡る〈1887-1945〉
 市民オーディトリウム 112
 ラ・ポルテ市
 社会主義リアリズム 50, 64, 192, 194, 199
 社会保険庁 230, 233
 ISSSTE
 社会保険庁国立医療センター Unidad de Oncología del Centro Médico Nacional del IMSS 198
 社会保険庁第1号地区病院 Hospital del Instituto Mexicano del Seguro Social Numero #1 170,
 190, 192, 194
 写実主義 134, 175
 シャルロット, ジャン Jean CHARLOT 213
 フランス生まれの画家。メキシコ壁画運動で指導的な役割を果たす〈1898-1979〉
 シャーン, ベン Ben SHAHN 159
 ロシア生まれのアメリカ人画家〈1898-1969〉
 十月サロン 134, 136
 シュポール/シュルファース Supports/Surfaces 236
 1960年代末から南仏で活動し、1970年パリの同名展に参加した作家たちの美術表現
 象徴主義 50
 職人、画家、彫刻家組合 Sindicato de Obreros Técnicos, Pintores y Escultores 105, 180

サ行

- サアグン, ベルナルディノ・デ Bernardino de SAHAGÚN 154
フランシスコ会士の歴史家 <1499?-1590>
- 最高裁判所 118
- 再興日本美術院 242
1914年より今日まで続く日本画家の団体。院展を主催
- 祭壇画 70
- サテリテ Satelite 233
メキシコ市の郊外住宅区域
- サバタ, エミリアーノ Emiliano ZAPATA 15, 19, 20, 58, 66, 99, 150
メキシコ革命の英雄 <1879-1919>
- サポテカ Zapoteca 76, 218
オアハカ地方に住むインディオ
- サポトラン・エル・グランデ Zapotlan el Grande
→シウダッド・グスマン
- サルセ, アルフレド Alfredo ZALCE 226
メキシコの画家, 写真家, 壁画作家 <1908- >
- サルモン, アンドレ André SALMON 173
フランスでキュビストとして活躍した画家, 評論家
- サロメ・ピニャ, ホセ José SALOMÉ PIÑA 132
メキシコのアカデミアの教師, 画家
- サン・アグスティン教会修道院 74
アクトパン市
- 三科会 242
二科会の進歩派及びアクション・グループやマヴォのグループが団結して結成した美術グループ
- サン・ガブリエル教会修道院 San Gabriel 74
チョルーラ市
- サンタ=アナ Antonio López de SANTA-ANA 29, 46
メキシコ独立期の軍人, 政治家 <1794-1876>
- サンタ・マリア教会堂 78
トナンツィントラ村
- サンタ・ロサリア市 Santa Rosalia
→カマルゴ市
- サンチアゴ教会堂 189
- サント・ドミンゴ教会堂 78
オアハカ市
- サント・ドミンゴ教会堂付属ロサリオ礼拝堂 78
プエブラ市
- サン・ハシント国立農業学校 San Jacinto 95
- サン・フランシスコ教会堂 76
テカリ市
- サン・フランシスコ市株取引会員昼食クラブ 154
- サン・フランシスコ修道院 76
アトラトラウカン市
- サン・フランシスコ・ジュニア・カレッジ 164
- サン・ペドロ・デ・ラス・コロニアス市 San Pedro de las Colonias 216
コアウィラ州
- サン・ホアン・デ・ウルア San Juan de Ulúa 99
ベラクルス市

国立演劇者連盟 Asociación Nacional de Actóres 198
 国立宮殿 Palacio de Nacional 140, 150, 154, 158, 160, 162, 166, 168, 229
 国立芸術院 Palacio de Bellas Artes 104, 112, 128, 160, 162, 166, 186, 189, 190, 214, 215
 メキシコ市
 国立芸術院 Palacio de Bellas Artes de la Habana 198, 207
 ハバナ市
 国立師範学校 Escuela Nacional de Maestros 128, 130
 メキシコ市
 国立小児科病院 Hospital Infantil de Mexico 170
 国立心臓病研究所 Instituto Nacional de Cardiología 164
 国立(第1)高等学校 105, 106, 108, 142, 143, 180, 181, 213, 216
 国立歴史博物館 Museo Nacional de Historia 20, 128, 196~198
 コストンブリスタ 29~34, 36, 40, 43, 48, 56
 ラテンアメリカで風景や市井の生活を描いた外国人ロマン主義作家の総称
 ゴチック様式 30, 67, 70
 古典主義 27, 30, 46, 47, 50
 ゴメス, マルテ・R Marte R. GOMEZ 166
 メキシコの学者, 工学博士
 ゴメス・デ・メナ, マリア・ルイサ María Luisa GÓMEZ DE MENA 188
 ゴメス・ロレンソ, ロセンド Rosendo GÓMEZ LORENZO 180
 メキシコのジャーナリスト
 ゴヤ Francisco de GOYA Y LUCIENTES 42, 134
 スペインの画家, 版画家 <1746-1828>
 コヨアカン Coyoacan 148, 162, 168, 170, 172, 226, 229
 メキシコ市内の地区名
 コラージュ 178
 貼り付け技法, キュビスムのパピエ・コレより発展し, ダダやシュルレアリスムで多様化された
 コリドス corridos 41
 コリマ Colima 95
 コリマ州にある火山
 コルテス, エルナン Hernan CORTÉS 58, 68, 108, 118, 122, 133, 150, 189
 スペイン人のアステカ征服者。今日のメキシコ市を築く <1485?-1547>
 コルテス宮殿 Palacio de Cortés 140, 148, 150, 154, 160
 クエルナバカ市。現在は美術館
 コルデロ, フアン Juan CORDERO 46~48
 メキシコ出身のアカデミア教師, 画家 <1824-1884>
 ゴールデン・ゲート万国博覧会 164
 コレヒオ・デ・バスコ・デ・キログ
 →パラッシオ・デ・ラス・バカス
 コレヒオ・フランコ=イングレス Colegio Franco-Ingles 175
 フランス人学校
 コレヒオ・マキシモ・デ・サン・ペドロ・イ・サン・パブロ Colegio Máximo de San Pedro y San Pablo 142
 国立第2中学校
 コンクリート 84, 85, 102, 128, 168, 170, 194, 195
 ゴンサレス・カマレナ, ホルヘ Jorge GONZALEZ CAMARENA 225
 メキシコの画家, 壁画作家 <1908- >
 コント, オーギュスト Auguste COMTE 13, 23
 フランスの哲学者, 社会学者 <1798-1857>
 コンプレッサー 85, 91, 183, 188

グラフィック・アート 38, 40, 43, 54, 199
 クラーベ, ペレグリン Peregrin CLAVÉ 46, 48, 78
 スペイン出身のアカデミア教師, 画家 <1810-1880>
 グラン, トーマス Thomas GRANN 72
 アメリカの民俗学者 <メキシコでの活動期1846-1897>
 クリオリオ Criollo 12, 14, 20, 34
 メキシコ生まれの白人
 グリザイユ grisaille 80, 150, 164
 一般に灰色調の色彩を用いた技法
 グリス, ホアン Juan GRIS 136
 パリで活躍したスペイン出身の作家 <1887-1927>
 『クリティカ』 Critica 185
 クリモフスキー, レオン León KLIMOVSKY 185
 アルゼンチンの画家
 グルーテスコ Grutesco 74, 76
 グロテスクとも言う西洋装飾模様のこと
 クレイン, ハート Hart CRANE 183
 アメリカの詩人
 グレコ, エル El GRECCO 136
 本名ドメニコス・テオトコプロス Doménikos Theotokopoulos. スペインの画家 <1541-1614>
 グレース・ホーン画廊 110
 ボストンにある画廊
 黒田清輝 242
 日本の洋画家。白馬会を結成し, 外光派の画風で日本の画壇に大きな影響を与える <1866-1924>
 ケツァルテンango Quetzaltenango 215
 グアテマラ北西部にある都市
 ゲレロ, ハビエル Xavier GUERRERO 142, 143, 177, 180, 216, 218
 グアダラハラ市で活躍したメキシコの画家 <1896- >
 ゲレロ・ガルバン, ヘスース Jesús GUERRERO GALVAN 225, 226
 メキシコの画家, 写真家, 壁画作家 <1910- >
 ゲレロ州 Guerrero 172, 182
 原住民言語教育研究所 Instituto de Alfabetización para Indígenas Monolingües 228
 原住民庁 Instituto de Nacional Indígenista 228
 現代具象派美術センター Centro Realista de Arte Moderno 189
 コアウィラ州 Coahuila 216
 コアトリクエ Coatlicue 118
 ゴイティア, フランシスコ Francisco GOITIA 58, 60
 メキシコの画家。初めて革命を主題に描く <1882-1960>
 公園ミュージアム Los Angeles Exposition Park 108
 後期印象主義 50
 『公共芸術』 Arte Público 192
 構成主義 64, 140, 242
 1920年代にソ連で展開された前衛芸術運動
 厚生省中央研究所 Laboratorio Central de la Secretaría de Salubridad 148
 ゴーギャン, ポール Paul GAUGUIN 52, 134, 136
 フランスの画家, 彫刻家 <1848-1903>
 国営電信公社オフィス
 →グアダラハラ大学
 国民革命党
 →メキシコ革命党
 国民芸術大賞 128, 205

カルデナス, ラサロ Lázaro CÁRDENAS 112, 186, 233
メキシコの大統領。在位1933-1938 <1895-1970>

カルロス 3 世 Carlos III 26
スペイン国王 <在位1759-1788>

カーロ, フリダ Frida KAHLO 143, 148, 162, 166, 172, 173, 229
メキシコの女性画家 <1910-1954>

乾式フレスコ fresco seco 80, 83
地塗面が乾いた状態で上絵を描く技法

カントゥー, フェデリコ Federico CANTÚ 226
メキシコの画家, 版画家, 壁画作家 <1908- >

北川民次 226, 243, 244
洋画家。1913年渡米後, 1923年にメキシコに渡り児童画教育に当たる <1894- >

ギャレリア・デ・アルテ・メヒカーノ Galería de Arte Mexicano 192
メキシコ市の画廊

キューバ革命 198

キューバ国立美術館
→ホテル・セビリャービルトモア

キュビズム cubism 134, 136, 138, 140, 173, 242
立体派

ギルド 26, 28, 88
職人組合と訳される。アカデミア成立以前は唯一の美術教育機関であり, また互助的な組織でもあった

キロガ, バスコ・デ Vasco de QUIROGA 154
ミチョアカン区司教, 16世紀の人文主義者

クアウテモック Cuauhtémoc 189, 190, 192
アステカ帝国最後の国王

グアダラハラ市 Guadalajara 33, 94, 95, 112, 114, 118, 119, 122, 124, 128, 130, 177, 181, 215, 216, 218
ハリスコ州

グアダラハラ市政庁 Palacio de Gobierno 114, 116, 117

グアダラハラ大学 Universidad de Guadalajara 112, 114, 181

グアナファト市 Guanajuato 131, 132
グアナファト州

グアナファト州 Guanajuato 131, 190

クイクイルコ Cuicuilco 72
紀元前3世紀頃より紀元3世紀まで栄えたメキシコ市近郊の遺跡。円形ピラミッドで有名

グイリエルミン, ロマノ Romano GUILLERMIN 176
メキシコの画家, 版画家

クエバ, アマド・デ・ラ Amado de la CUEVA 177, 178
グアダラハラ市で活躍した画家。シケイロスの助手をつとめる

クエルナバカ市 Cuernavaca 140, 148, 150, 154, 170, 200, 241
モレロス州。フランシスコ会士殉教図が発見されたサン・フランシスコ教会堂がある

グスマン, マルティン・ルイス Martín Luis GUZMÁN 65
メキシコの文学者

グティエレス, エウラリオ Gutiérrez EULALIO 66
1914年メキシコの臨時大統領に就任 <1881-1939>

グティエレス, ホセ・L José L. GUTIÉRREZ 186
メキシコ, モレロス州出身の画家 <1900-1968>

国吉康雄 243
アメリカで活躍した日本人画家 <1889-1953>

クラウセル, ホアキン Joaquín CLAUSELL 52
メキシコの画家。印象派的な作風 <1866-1935>

19世紀フランスで戸外の光で制作した画家たちを指す。日本では黒田清輝を中心とした洋画家集団を指す

ガオナ, ガブリエル・ビセンテ Gabriel Vicente GAONA 41

メキシコのグラフィック・アーティスト。メリダ市で活躍。通称ピチエタ〈活動期1840-1860年代〉

科学と芸術のための大学美術館 Museo Universitario de Ciencias y Artes 207
UNAM

革命的画家, 彫刻家, 版画家組合 143, 180

カサウランク, プイグ Puig CASSAURANC 106, 181

バスコンセロスの後を継いだ文部大臣

カサス, マヌエル・T Manuel T. CASAS 96

サン・カルロス美術学校の学生ストライキと組合の指導者

カーサ・デ・ラ・ムヘール 229

女性の館

カシノ・エスパニョール Casino Español 182

メキシコ市にある画廊

カスターニョ, アンドレア・デル Andrea del CASTAGNO 70

イタリアの画家〈1423-57〉

カストロ, フィデル Fidel CASTRO RUZ 198, 199

キューバの政治家, 1959年より首相〈1926- 〉

カストロ, フェリッペ Felipe CASTRO 78

メキシコのアカデミアで教えた新古典主義の建築家, 画家〈メキシコでの活動期1880年代〉

カソ, アントニオ Antonio CASO 65

メキシコの哲学者〈1883-1946〉

カチョ, ボラニョス Bolaños CACHO 176

メキシコの彫刻家

カーネギー・インスティテュート 213

カーネギー財団の基金を元に様々な文化活動を行なう研究所

カバーニャス, フアン・クルス・ルイス Juan Cruz Luis CABAÑAS 118

カバーニャスカス病院 Hospicio Cabañas 114, 118, 122, 124, 127

カビーノ・オルティス図書館 Biblioteca Gabino Ortiz 118

ヒクイルパン市

カビルド, ラシエル Raziel CABILDO 96

サン・カルロス美術学校の学生ストライキと組合の指導者

カマチョ, アビラ Avila CAMACHO 166

メキシコの軍人

カマルゴ市 Camargo 174

チワワ州

カラスコ, ロレンソ Lorenzo CARRASCO 192

メキシコの建築家

カラベラ 41, 42, 166

骸骨

カランサ, ベヌスティアノ Vénustiano CARRANZA 19, 20, 22, 60, 99, 177

メキシコの軍人, 政治家〈1859-1920〉

カリフォルニア・スクール・オブ・ファイン・アーツ 154

カリフォルニア・パレス・オブ・ザ・リージョン・オブ・オナー 154

在郷名誉軍人のための殿堂

カリリョ・ヒル美術館 110, 134

ガルシア・ブストス, アルチュエロ Arturo GARCIA BUSTOS 229

メキシコの画家, 壁画作家, 建築家〈1926- 〉

エル・タヒン El Tajin 74
ベラクルス州北部メキシコ湾岸の近くにある遺跡

エルンスト、マックス Max ERNST 178
ドイツ出身のシュルレアリスト。コラージュの作品を作る <1891-1976>

エンカウステイク encaustic 80, 142, 180, 184, 213
密蝋と各種の顔料を混合した絵具で描く絵画技法

エンリケス・ウレニャ、ペドロ Pedro HENRÍQUEZ UREÑA 65
ドミニカ出身の学者 <1884-1946>

オアステペック市 Oaxtepec 76
モレロス州。サント・ドミンゴ教会修道院がある

オアハカ市 Oaxaca 78
オアハカ州。サント・ドミンゴ教会堂がある

オアハカ州 Oaxaca 12, 76, 218

オイギンス、パブロ Pablo O' HIGGINS 223
アメリカの画家。初期より壁画運動に参加する <1904- >

オーウェル、ジョージ George ORWELL 187
イギリスの小説家 <1903-1950>

岡本太郎 230, 245
洋画家。岡本一平とかの子の長男。原色を使った激しいタッチの半抽象形態を描く <1911- >

オカンボ、ビクトリア Victoria OCAMPO 185
アルゼンチンの画家、小説家

オゴルマン、セシル・クロフォード Cecil Crawford O' GORMAN 219
英国生まれの画家、壁画作家。1895年よりメキシコ在住。フアン・オゴルマンの父 <1874-1943>

オゴルマン、フアン Juan O' GORMAN 219, 220, 222
メキシコの画家。国立自治大学中央図書館の壁画が有名 <1905-1982>

オブレゴン、アルバロ Alvaro OBREGÓN 19, 20, 22, 60, 66, 99, 238
メキシコの軍人、政治家 <1880-1928>

オラギベル、フアン Juan OLAGUIBEL 176, 177
メキシコの画家

オリサバ技術者教育センター
→オリサバ工業学校

オリサバ工業学校 106

オリサバ侯爵邸
→タイルの家

オリサバ市 Orizaba 60, 106, 177, 228
ベラクルス州

オリンピック・スタジアム Estadio Olímpico 170

オルメド、ドローレス Dolores OLMEDO 172

オロスコ、パスクワル Pascual OROZCO 19
メキシコの軍人、政治家

オロスコ、ホセ・クレメンテ José Clemente OROZCO 60, 94~130, 142, 143, 181, 186, 190, 205, 210~
212, 216, 223, 231, 235, 243, 245
壁画三巨匠の一人 <1883-1949>

オロスコ・リベラ、マリオ Mario OROZCO RIVERA 228, 229
メキシコの画家、壁画作家 <1930- >

力行

絵画及び造形用材料実験工房 Taller de Ensayo de Pinturas y Materiales Plásticos 190
メキシコ

絵画材料実験工房
→シケイロス実験工房

イダルゴ州 74, 76
 イトゥルビデ, アグスティン・デ Agustín de ITURBIDE 154
 メキシコ独立期の軍人, 政治家 <1783-1824>
 『イーホ・デル・アウイソテ』 El Hijo del Ahuizote 13, 99
 イラプアト市 Irapuato 175
 グアナファト州
 印象主義 50~52
 インスタレーション 168, 208
 インスルヘンテス劇場 Teatro Insurgentes 164, 168, 170, 171
 インスルヘンテス通り Ave. Insurgentes 170
 インディオ 52, 56, 58, 61, 66~68, 72, 74, 76, 83, 85~87, 89, 90, 95, 105, 108, 118, 122, 138, 150, 154, 164, 170,
 173, 174, 177, 188, 212, 218, 227~229, 239, 240
 インディヘニスモ Indigenismo 186
 インディペンデント・レーバー・インスティテュート 159
 イントナコ intonaco 83, 103
 湿式フレスコ画で地塗りの上に施す支持材の上塗り
 『インパルシアル』 El Imparcial 99
 ウアステカ Huasteca 74
 現在のサン・ルイ・ポトシ州を中心にして興った古代文明
 ウィスコンシン・ユニオン 110
 ウィルソン, ヘンリー Henry WILSON 19
 メキシコ革命時のアメリカ合衆国の駐メキシコ大使
 ウエルタ, ビクトリアーノ Victoriano HUERTA 19, 20, 177
 メキシコの軍人, 政治家 <1845-1916>
 ウッチェロ, パオロ Paolo UCCELLO 70, 140, 150, 160
 イタリアの画家, 工芸家 <1397-1475>
 ウフィツィ美術館 110, 140
 フィレンツェ
 ウレタン 236
 エイゼンシュテイン, セルゲイ Sergei Mikhailovich EIZENSHEIN 182
 ソ連の映画監督 <1898-1948>
 A. C. A. ギャラリー 200
 ニューヨーク
 エジプト 70
 『エセルシオール』 Excelsior 118
 エチェベリア Álvarez Luis ECEVERRÍA 238
 メキシコ大統領。在位1970-1976 <1922- >
 エチルシリコン ethylsilicon 91
 炭化水素基が珪素に結合し, 耐水性を持つポリマー
 榎本移住団 242
 榎本武揚の企画で, 1897年初めてメキシコに渡った36人の移民団
 エボナイト ebonite 91
 硬質ゴム的一种
 エラン, サトゥルニノ Seturnino HERRÁN 52, 215
 メキシコの画家。総合主義的作風でインディオの生活を描く <1887-1918>
 エリソンド, フィディアス Fidias ELIZONDO 176
 メキシコの彫刻家
 エリュアール, ポール Paul ÉLUARD 178, 187
 フランスの詩人 <1895-1952>
 エル・アンパロ El Amparo 181
 メキシコの鉱山

- ニューヨークで活躍した。ジ・エイト（8人組）のグループが中心
 アテネオ・グループ 65
 ディアス政権下に生まれた、実証主義に代わる思想を研究した哲学、文学者グループの名称。
 1907年に発足、1914年まで続く
 アート・クラブ・オブ・シカゴ 112
 アート・ステューデント・リーグ 108
 ニューヨークに本部を置き、美術教育からプロモーションまでを行なう組織
 『アート・ブルティン』 Art Bulletin 231
 アトラトラウアカン市 Atlatláhuacan 76, 78
 メキシコ州
 アナウワカリ美術館 Anahuacalli 132, 161, 172, 173
 メキシコ市コヨアカン地区にある。リベラのコレクションと作品を展示
 アポリネール, ギョーム Guillaume APOLLINAIRE 136
 フランスの詩人, 批評家 <1880-1918>
 アマドール, グラシエラ Graciela AMADOR 181
 メキシコの女性詩人
 アメリカ派 243
 アラゴン, ルイ Louis ARAGON 178, 187
 フランスの詩人, 小説家 <1897-1982>
 アラメーダ公園 Parque Alameda 164, 166
 『アリエル』 Ariel 65
 ホセ・エンリケ・ロドが1900年に出版したエッセイ集。ラテンアメリカにおける20世紀の思想
 形成に大きな影響を与える
 アリエンデ, イグナシオ Ignacio ALLENDE 190
 アルタミラ 70
 『アルテス・プラスティカス』 190
 アール・ヌーボー 50
 アルファロ・シエラ, アントニオ Antonio ALFARO SIERRA 175
 アルファロ・シケイロス, シプリアーノ Cipriano ALFARO SIQUEIROS 174, 175
 アルファロ・シケイロス, ダビッド
 →シケイロス
 アルファロ・シケイロス, ヘスース Jesus ALFARO SIQUEIROS 175
 アルプ, ハンス Jans ALP 178
 フランスで活躍したドイツ出身の画家, 彫刻家 <1887-1966>
 アルベルティーニ美術館 108
 ベネツィア
 アレナル, エレクト Electa ARENAL 189
 ルイス・アレナルの妻
 アレナル, ルイス Luis ARENAL 186, 187, 189, 226
 メキシコの画家, 建築家, 壁画作家 <1908- >
 アレナル・デ・シケイロス, アンヘリカ Angélica ARENAL DE SIQUEIROS 175
 アンジェリコ, フラ Fra ANGELICO 70
 イタリアの画家 <1387-1455>
 アンティボラ antívola 103
 壁画の下絵用型紙
 アンヘレス, フアン・カルロス Juan Carlos ANGELES 185
 アルゼンチンの画家
 石垣栄太郎 243
 洋画家。1909年より1951年まで滞米。社会派の主題を求める <1893-1958>
 イダルゴ, ミゲル Miguel HIDALGO Y COSTILLA 12, 114, 116, 130, 154
 メキシコ独立運動の指導者 <1753-1811>

索引

本来なら脚注をつけるべきであったが、本書の性格と読みやすさを考慮し、注釈付索引という形でまとめた。

項目の選択にあたっては以下の優先順位を考慮した。

1. メキシコ美術に関連する項目。
2. 美術分野一般に関連する項目。
3. メキシコの歴史、政治、経済、社会、文化、地理、人名に関連する項目。
4. 歴史、政治、経済、社会、文化、地理、人名一般に関連する項目。
5. その他。

表記については慣例を重視した。これは外国人名等、スペイン語による現地発音通りの表記にした場合の混乱を避けたためである。

スペースの制約と読みやすさを考慮し、一部邦訳のみを記したものもある。

ア行

INBA Instituto Nacional de Bellas Artes 190, 194, 198

アカデミア 26~29, 31~34, 43, 46~48, 50, 51, 54, 61, 89, 90, 98, 102, 105, 107, 221, 223

古代ギリシャのプラトンの学園アカデメイアに由来する。美術教育の機関として制度化されたのは16世紀になってから

アカデミア・デ・サン・カルロス 27, 33, 34, 95, 99, 132, 134, 150, 175, 176, 215, 218, 225, 244

アカデミア・デ・サン・フェルナンド 26, 134

アカデミズム 27, 50

アカプルコ市 Acapulco 172

ゲレロ州

アクション・グループ 242

大正期二科会の進歩派で作られた美術グループ

アクトパン市 Actopan 74

イダルゴ州。アグスティン教会修道院がある

アクリル 80, 186, 196~198, 200, 203~206, 227, 228, 230

アコスタ, イネス Ines ACOSTA 131

アシエンダ Hacienda 14~18, 36, 175

植民地時代に発展した大土地支配形態で、莊園とか大農園と訳されることが多いが、鉱山なども含む

アジャンター 70

アステカ Azteca 42, 48, 74, 118, 148, 189

スペイン人到来期にほぼメキシコ全土を支配していた原住民の一族

アスベスト 200, 203~206

アスレホス Aztléjos 192

釉色タイルのこと。語源はアラビア語で、植民地時代にムデハル様式と共に輸入されて以来の伝統となっている

アスンソロ, イグナシオ Ignacio ASUNSOLO 176

メキシコの彫刻家

アッシュ・キャン・スクール 244

ゴミタメ派ともいう。都市の情景を汚れた部分まで写実的に描いた作家たちで、20世紀初頭ニ

加藤 薫 (かとう かおる)

中南米・カリブ圏・ラティーノ美術史研究者、美術評論家。神奈川大学教授。
1949年神奈川県鎌倉市生まれ。現在は静岡県御殿場市在住。国際基督教大学卒。
Bゼミ・スクール修了。ウニベルシダ・デ・ラス・アメリカス(メキシコ)大学大学院修了。
メキシコ国立美術研究所研究員などを経て現職。日本ラテンアメリカ学会会員、美術史学会会員、LASA会員、NALAC会員など。

主な著書

「メキシコ美術紀行」(新潮社)、「ラテンアメリカ美術史」(現代企画室)
「メキシコ壁画運動」(平凡社)、「ニューメキシコ 第四世界の多元文化」(新評論)
「キューバ★現代美術の流れ」(スカイドア)、「21世紀のアメリカ美術
チカーノ・アート」(明石書店)、訳書「和英対峙 現代美術演習」全5巻(現代企画室)など。ほかに共著、共訳書、論文など多数。

メキシコ壁画運動 ーリベラ、オロスコ、シケイロスー

2003年2月5日 第1刷発行

著者 加藤 薫
発行者 池上 淳
発行所 〒229-1124 神奈川県相模原市田名11240
アメニティタワー5F

現代図書

TEL 042-763-6442(代) FAX 042-763-6436
振替口座 00200-4-5262 ISBN 4-434-02803-0
URL <http://www.gendaitosho.co.jp/>
E-mail shoseki@gendaitosho.co.jp

発売元 〒112-0012 東京都文京区大塚 3-21-10

株式会社 星雲社

TEL 03-3947-1021(代) FAX 03-3947-1617

印刷・製本 青史堂印刷

落丁・乱丁本はお取り替えいたします。 Printed in Japan 2003



9784434028038

ISBN4-434-02803-0 C0071 ¥2857E

定価(本体2,857円+税)



1920071028576

【つぐみ】——一九二九年からメキシコ市の国立宮殿露臺に

『メキシコの歴史』を手がける。

総面積二七五平方メートルにちぎられた画面は、植民地時代以前から
革命を経て現代までのメキシコの歴史を凝縮して見せている。



発行所 現代図書
発売元 星雲社